

二本松市文化財調査報告書 第17集

二本松城址Ⅳ

—平成12年度発掘調査報告書—

平成13年3月

二本松市教育委員会



二本松城址（ミニゴルフ場北）調査状況



二本松城址西側全景（本丸と平成12年度調査区）



銅碗（SK03出土）

序　　言

平成3年3月、霞ヶ城公園整備計画に伴う本丸跡所在の天文台等撤去に際して、二本松城址における初の本格的な発掘調査を実施して以来、早10年を経た今日、調査は実に第5次を重ねることになりました。

その間、同5年8月に着手した本丸石垣修築復元工事は総工費約5億3千万円、約二ヶ年を費やし、さらに全国に先駆けた独自のマニュアルを用いて完成を見ております。その後、二本松城址保存管理計画を策定し、長期計画による二本松城址総合調査事業を同10年度からスタートさせました。同11年度からは、幸いにも文化庁所管国庫補助対象事業の採択をいただきながら、城址全容の解明を進めるべく遺構確認のための発掘調査を実施してまいりました。

そして、本年度は本丸跡西側直下の平場、通称ミニゴルフ場を対象といたしました。その結果、数々の遺構が確認されましたが、その中でも、自然石を用い、野面積みで構築された古いタイプの井戸跡は、当時の技術を駆使した合理的な積み方であり、改めて我が先人の巧みな技に感服した次第であります。

本書は、これらの成果をまとめたものですが、今後城址全体の姿を探る上で、また利活用を目的とした整備計画の策定のうえで、大いに参考にできるものと考えております。

最後に、本調査の実施にあたり、ご指導、ご助言をいただきました鈴木 啓先生、並びに福島県教育庁文化課、そして熱意をもって作業に従事いただいた方々に対し、衷心より感謝の意を表します。

平成13年3月

二本松市教育委員会教育長　市　川　義

例　　言

1. 本書は、平成12年度国庫補助事業として二本松市教育委員会が実施した二本松城址総合調査事業における発掘調査の結果をまとめたものである。
2. 出土遺物の整理は洗浄・注記を菅野幸子、高島由佳(二本松市教育委員会文化課臨時職員)が実施し、分類・復元については門馬久子(二本松市教育委員会文化課臨時職員)の協力を得た。
3. 遺物の実測は門馬、根本貴徳(東北学院大学)が、トレースは桑原尚子(二本松市教育委員会文化課臨時職員)が担当した。また遺構、遺物の挿図・版組は中村が担当し、その修正は門馬、桑原の協力を得た。
4. 遺構および遺物の写真は中村が担当し、航空写真は(株)シン技術コンサルによる。
5. 遺構の全体平面写真測量は(株)シン技術コンサルに委託した。
6. 本報告書の執筆は中村が担当した。
7. 本調査で出土した遺物および写真・図面等資料は二本松市教育委員会が保管している。

凡　　例

1. 測量における基準設定は(株)シン技術コンサルに依頼し、遺構実測図中の方位は座標軸を示す。
2. 遺構実測図のうち断面図に示した数字は海拔高度を示し、平面図のアルファベットは対応する断面図の位置を表している。
3. 特徴的な遺構および特徴的な遺物を出土した遺構に限って記述し、その他は一覧表で掲載した。
4. 遺物は銅碗のみ原寸、その他は1／2で収録した。遺構については図ごとに縮尺を示した。
5. 遺構断面図の土の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色帖(1990年版)』によった。
6. 陶器類において釉の範囲を一点鎖線で示した。
7. 遺物実測図における遺物の寸法において、()のあるものは残存長を示し、単位はcmである。
8. 本文中で使用した略号は次のとおりである。

S B…掘立柱建物跡 S K…土壤 S D…溝跡 P…柱穴 S E…井戸跡

目 次

原色図版

序文

例言・凡例

第1章 過去の調査.....1

第2章 調査経過.....4

 第1節 調査要項.....4

 第2節 調査に至る経過.....4

 第3節 調査日誌.....5

 第4節 調査方法と概要.....8

第3章 調査結果.....8

 第1節 遺構と遺物.....8

 (1)掘立柱建物跡.....8

 (2)井戸跡.....13

 (3)溝跡.....14

 (4)石列遺構.....19

 (5)石敷遺構.....21

 (6)石組遺構.....21

 (7)土壙.....21

 (8)ピット.....25

 第2節 遺構外出土遺物.....25

 (1)陶磁器類.....25

 (2)銅・鉄製品.....28

 (3)碁石.....28

 第3節まとめ.....28

挿図目次

第1図 遺跡位置図

第11図 石列1平面図および1・3区東西ベルト断面図.....17

第2図 過去の調査区域および第5次調査範囲.....3

第12図 石列2平面図および6区傾斜部断面図.....18

第3図 遺構配置図.....6

第13図 石臼実測図.....20

第4図 調査区断面図.....7

第14図 石敷遺構平面図および断面図.....22

第5図 S B01・S B02平面図およびS B02断面図.....9

第15図 S K03出土銅碗.....23

第6図 S B01断面図.....10

第16図 S K01・S K02・S K03・S K04・S K09

第7図 6区遺構配置図.....10

平面図および断面図.....24

第8図 7区平面図および断面図.....11

第17図 S K05断面図・ピット平面図および断面図.....25

第9図 S E01内部石垣立面図.....12

第18図 出土遺物実測図 陶磁器類(1).....34

第10図 S E02平面図および断面図、

第19図 出土遺物実測図 陶磁器類(2).....35

 S D01・S D02・S D04断面図.....15

第20図 出土遺物実測図 鉄・銅製品、石製品.....36

表 目 次

第1表 ピット観察表.....29 第3表 出土遺物観察表[銅製品].....31

第2表 出土遺物観察表[鉄製品].....31 第4表 出土遺物観察表[碁石].....31

図版目次

原色図版1 二本松城址(ミニゴルフ場北)調査状況

原色図版2 二本松城址西側全景およびS K03出土銅碗

図版1 調査区全景およびS E02精査状況

図版5 出土遺物

図版2 S E01精査状況

図版6 出土遺物

図版3 石列・溝跡・石敷遺構精査状況

図版7 出土遺物

図版4 石組遺構・土壙精査状況

図版8 出土遺物:銅・鉄製品、碁石



第1図 遺跡位置図

第1章 過去の調査

当城址に関する調査は、本格的な調査としては平成3・4年度に実施された本丸部平面調査(第1次)、平成5～7年度に実施された本丸石垣修築復元に伴う調査(第2次)に続き、平成10・11年度には二本松城址総合調査事業として新城館に比定される平場の調査(第3・4次)を実施している。以下にその概略をまとめる。(第2図)

【第1次調査】期間：平成3年3月6日～同年8月2日(延97日間) 面積：約3,000m²

霞ヶ城公園整備計画に伴い、本丸跡の天文台及び休憩所・便所等の既存建造物が撤去されたため、本丸跡平場をA・B・C地区、その周辺部をD地区、さらに本丸直下大石垣と前面平場をE地区と便宜上呼称し、調査を実施した。なお、当調査が二本松城址における初の本格的な発掘調査であった。

〈発見遺構〉 A～C地区：掘立柱建物跡8棟・掘立柱塀跡3列・礎石建物跡1基・井戸跡1基・溝状遺構1条・土壙3基・性格不明石列1条

D地区：虎口右側隅角部から天守台東側入角部に至る全長約56mの石垣。

E地区：現存大石垣の右側に連続する高さ約4m・長さ約8mの石垣、及び
大石垣前面平場から柱穴とピット約200穴・土壙1基。

〈出土遺物〉 A～C地区：小刀(小柄)・こうがい・吸口・古銭「至道元寶」「熙寧元寶」「元
豐通寶」「政和元寶」「洪武通寶」「永樂通寶」「寛永通寶」

D地区：落款・石臼・石皿(ヒデバチ)

E地区：油皿・縁・雁首・古銭「熙寧元寶」

〈まとめ〉 A～C地区検出の建物跡は、配置関係や切り合いなどから5期にわたる時期区分が想定された。特にSB01は庇付きの身舎と考えられ、伊達成実による整備期に相当する主屋で、その東西に各々付属建物を配している。D地区の検出石垣は、最も残りの良い部分で9石であったが、始築時に相当する慶長期の穴太積みによる古式石垣をはじめ、その後に改築された元和期・寛永期・江戸後半期と、各時期の石積み様式が確認でき、本丸石垣の変遷を紐解く上で大きな成果であった。なお、詳細については、『二本松城址I』(平成2・3年度調査報告書 平成4年3月)を参照されたい。

【第2次調査】期間：平成5年8月13日～同7年6月30日 面積：約2,200m²

第1次調査の成果を受け本丸石垣を修築・復元するため、同3年11月に二本松城址石垣復元委員会を組織し、文化財としての本格的な整備を図るべく検討作業に入った。その結果、第1次調査前の既存石垣の大部分は昭和期の修復であることが判明したため、基本方針として本丸全体を対象に“二本松城址が城郭として機能していた時代=安土桃山・江戸時代の技法の幅のなかで、修築・復元を進めることが望ましい。”との結論付けがなされた。

これを受けて、二本松城址本丸石垣修築復元事業に着手した。そして、工事と調査が大規模、かつ慎重さを要する学術調査を目的とすることから、教育委員会と市長部局の専任

職員からなるプロジェクトチームを組織し、約2年の歳月と総工費約5億3千万円を費やして実施した。

- 〈基本方針〉
1. 時代性=安土桃山・江戸時代に機能した二本松城の、各時期の石積み様式を活かしたこと。
 2. 伝統技術=先人が残した知恵と技術をくみとり、石の石配方法や加工方法にそれぞれの時代を反映した技術を採用したこと。
 3. 地域性=二本松城の構築技術を調査・検討し、ノリ・ソリなど二本松城ならではの特徴を活かしたこと。
 4. 強度=裏込め石の選択や、軟弱な支持基盤の補強、雨水処理など、できうる限りの耐久性を考慮したこと。

〈まとめ〉二本松市独自に作成した作業工程要領=マニュアルに基づく検討を経て、全国でも初めての例とされる本丸石垣全体を対象とした当事業は、所期目的を概ね達成できたといえる。また、工事に並行して隨時慎重な調査を実施したことで、現存石垣の内部から旧石垣の一部が検出され、古記録・絵図との比較検証から、蒲生氏による慶長初期の本丸石垣を、寛永初期に加藤氏が拡張して現況の縄張りに至ったことが判明したことは、大きな調査成果であった。なお、詳細については、『二本松城址Ⅱ』(二本松城址本丸石垣修築・復元事業報告書 平成9年3月)を参照されたい。

【第3次調査】期間：平成10年6月8日～同年7月24日(延32日間) 面積：約500m²

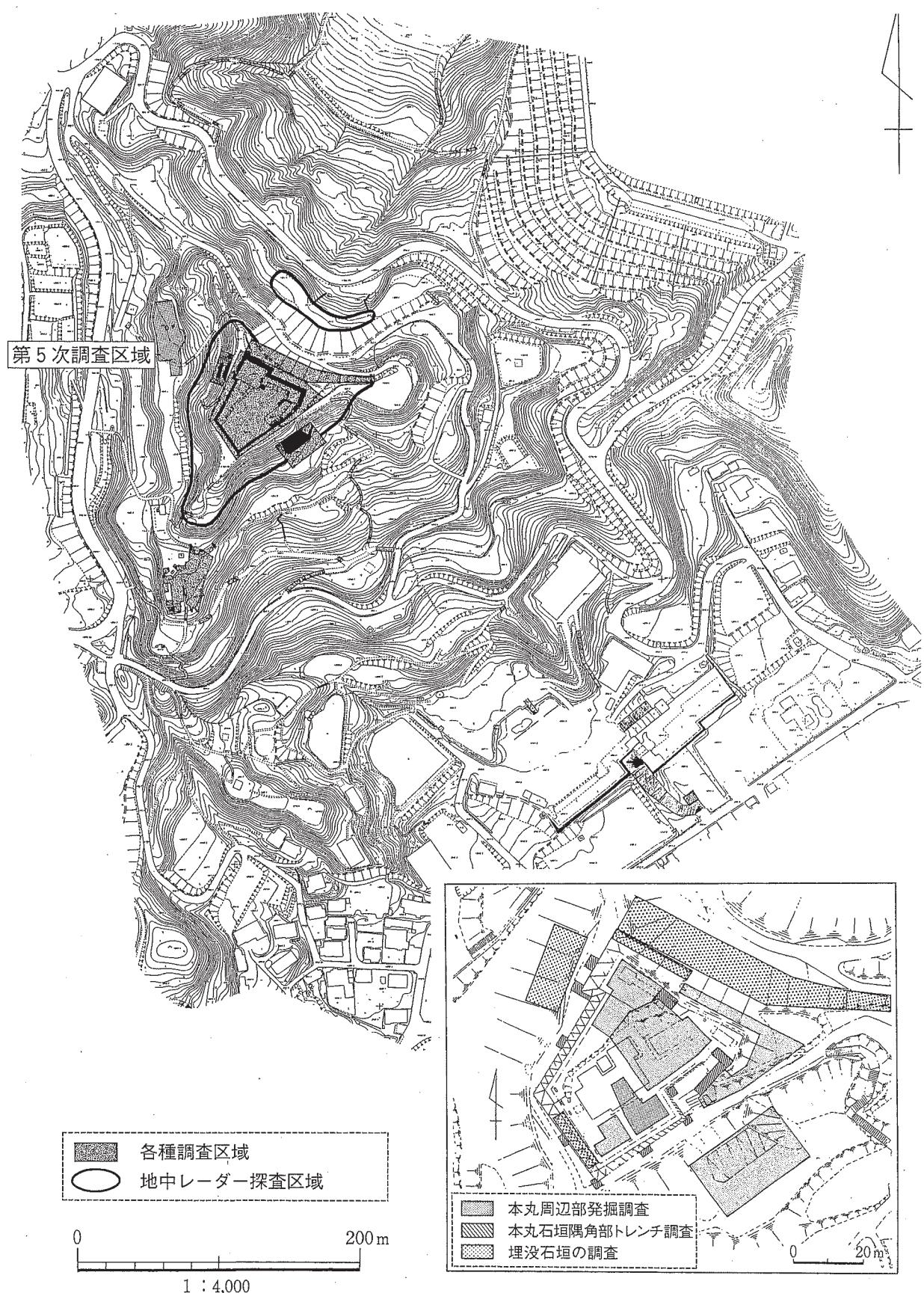
【第4次調査】期間：平成11年6月7日～同年8月21日(延46日間) 面積：約600m²

平成6年度に「二本松城学術検討委員会」を組織し、主に遺跡としての側面から城址の保存管理について調査・検討を行い、同9年度に二本松城址保存管理計画を策定した(『二本松城址保存管理計画報告書』平成10年3月)。その中で、今後の保存管理及び活用をする上で、城址全体の現状把握と遺構確認等が最優先とされた。この提言を受け、同9年度に城址全体の現況平面測量図を作成、同10年度から「二本松城址総合調査事業」と称し、長期計画により資料収集を目的とした遺構確認調査を実施することとなった。調査地区は、中世から戦国期の新城館及び再蒲生期二城代時代の西城比定地である通称“少年隊の丘”を対象とし、土捨て場・平場面積等の関係から第3次・第4次の2ヶ年にわたって調査を実施した。なお、平成11年度の第4次調査から文化庁所管国庫補助対象事業となった。

〈発見遺構〉掘立柱建物跡3棟・掘立柱柵列跡6条・溝跡2条・土壙11基・焼土遺構6基・石敷遺構1基・石組遺構2基

〈出土遺物〉陶磁器片(相馬・志野織部・肥前等)・鉄製品(釘・ヒウチガネ・クサビ・弾丸・小札・鉄宰等)・銅製品(雁首等)・漆木製品・古銭・碁石

〈まとめ〉中世から戦国期に相当する遺構・遺物はほとんど確認されず、掘立柱建物跡のうち2棟は出土遺物から18世紀後半期に位置付けされた。しかし、絵図等史料から当地区に新城館及び西城が置かれたことはほぼ間違いない考察であ



第2図 過去の調査区域および第5次調査範囲

ることから、中世から近世後半期まで普遍的に建物等諸施設の建て替えが行われたためと判断された。また、焼土遺構のうち直径4m・深さ2mほどの大穴からは、人為的に廃棄された大量の焼土と炭化材が出土した。畠山・伊達両氏の二本松城攻防戦の末、畠山氏が自焼し開城、入城した伊達成実がその跡を清掃したとする諸記録がある。それによると、自焼した場所を実城・本丸・本城・城中などと記している。第1次調査では自焼の痕跡と見られる遺構はまったく確認されていないことから、上記の焼土遺構が自焼、そして清掃の痕跡である可能性が極めて高いと考察された。それゆえ、当該地区は少なくとも天正期において、本丸・本城的機能を十分有していたと判断された。なお、詳細については『二本松城址Ⅲ』(平成10・11年度発掘調査報告書 平成12年3月)を参照されたい。

第2章 調査経過

第1節 調査要項

遺跡名称	二本松城址(遺跡地名表登録番号 2100019)
所在地	福島県二本松市郭内四丁目228-1
遺跡現況	公園
調査面積	約825m ² (遺跡全体面積72,000m ²)
遺跡性格	城館
遺跡時期	中世～近世
調査目的	保存管理計画に基づく資料収集のための発掘調査
調査期間	第5次：平成12年(2000年)9月14日～同年11月15日(延べ43日間)
土地所有者	二本松市(市長 根本尚美)
調査主体	福島県二本松市教育委員会 教育長 市川 義
調査担当	中村真由美(二本松市教育委員会文化課主任主事・日本考古学協会会員)
調査補助員	桑原尚子
調査指導	田中正能(二本松市文化財保護審議会委員) 鈴木 啓(二本松市文化財保護審議会委員)
作業員	安斎丑一 石川公夫 菅野勝与 国分正三 佐藤四郎 斎藤武雄 田中 繁 土屋 博 橋本陽子 早坂昌未 安田ミヨ子 柳田ユキ子 山田安子 松本長吉 宮島三郎 吉田清治 渡辺金造 渡辺千代 渡辺松夫 渡辺松吉 渡辺三男 (以上、地元有志)

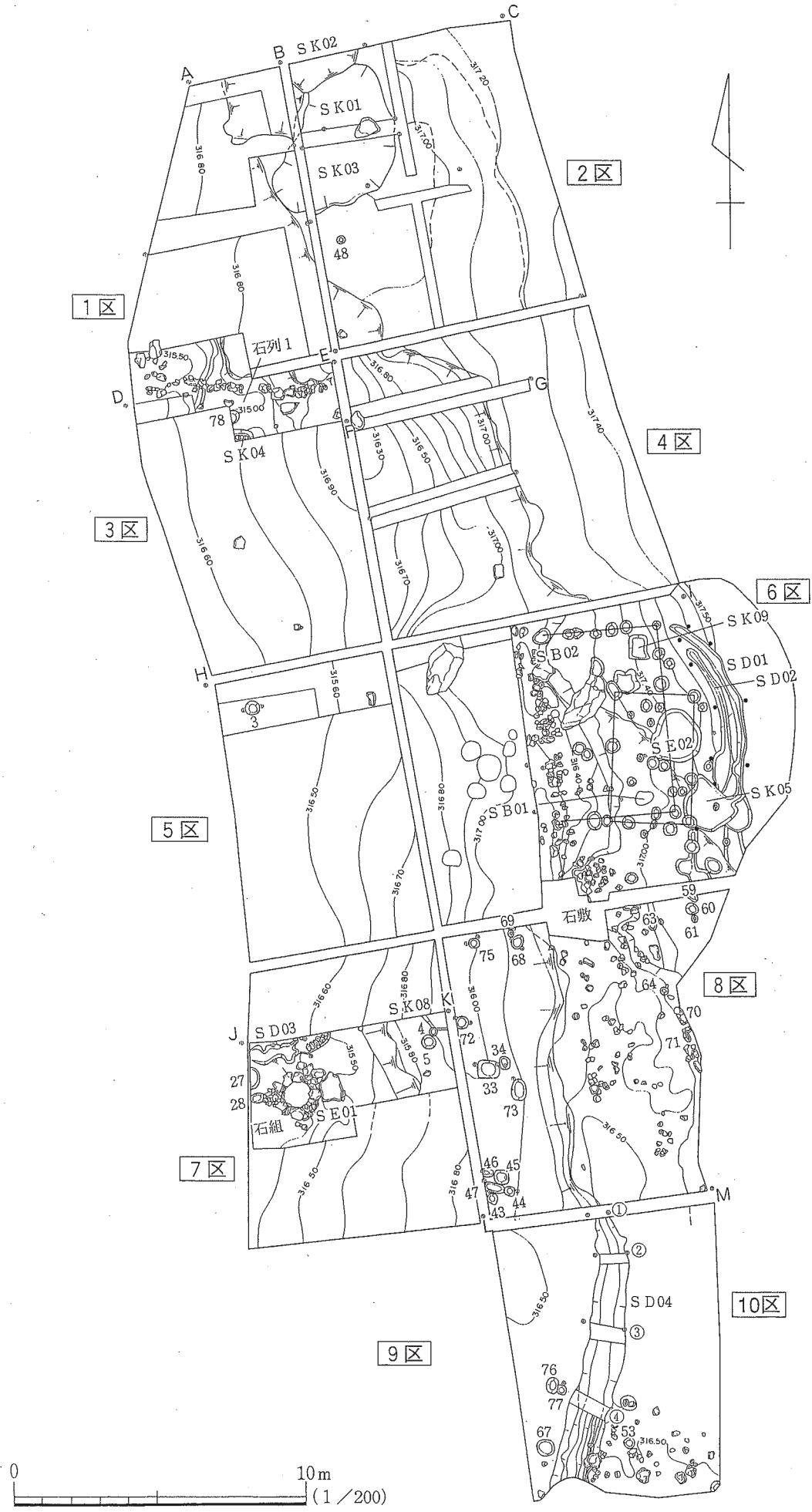
第2節 調査に至る経過

当城址は都市公園として利用されていることから、“遺跡の保存”と、“公園としての活

用”という2つの面を推進していく必要がある。市教育委員会では、活用するためには城址の現状把握、すなわち遺構の残存する場所と規模、性格等を把握することが不可欠であるとして、「二本松城址総合調査事業」と称し、長期計画により資料収集を目的とした発掘調査を実施することとした。平成9年度には城址の平面測量が実施され、正確な地形の把握がなされた。平成10・11年度は東・西城の二城代時代に西城が置かれていた「新城館」と比定される平場である少年隊の丘を調査対象とした。今年度は本丸西側、一段下の平場であるミニゴルフ場を調査対象とした。畠山期には侍屋敷がおかれた帶郭として描かれており、中世に属する遺構の検出が予想される。

第3節 調査日誌

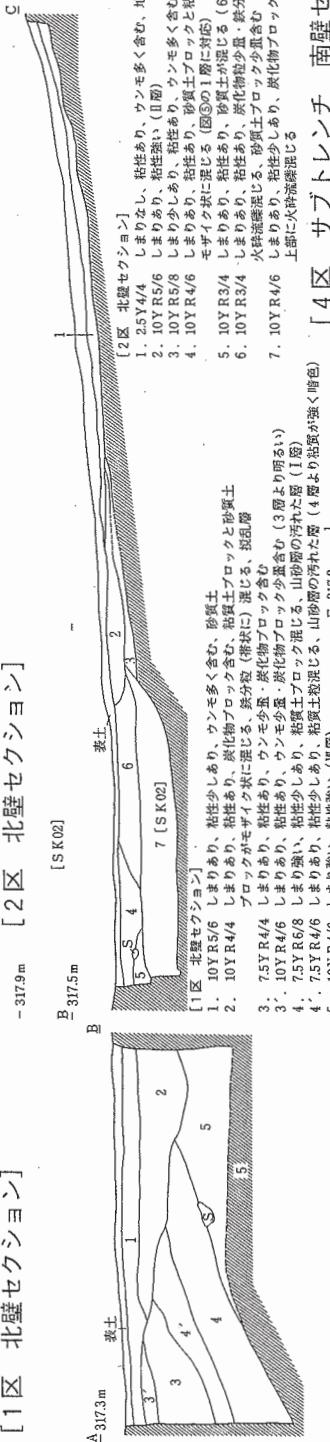
- 9月14、16日 機材搬入。調査区設定(1～10区)。重機による表土剥ぎ開始。
- 9月18日 起工式。北側より荒掘り開始。
- 9月19～20日 1～4区の荒掘り。
- 9月21～22日 1～3区の精査。6区の荒掘りおよび東側の崩落土の除去。崩落土内より遺物が検出される。1、3区の西側は傾斜して落ちる地形を盛土して平坦に整えていることがわかる。
- 9月25～27日 1区東西セクションの実測(1/20)。2区で地山上に整地層を検出。範囲を確認の上断ち割りセクションを実測(1/20)。3～5区精査。
- 9月28～29日、10月2日 2区SK01の半裁。4区は整地部分にサブトレンチを設定。3区では東西に長いサブトレンチを設定、調査。5、6区精査。
- 10月3～6、10日 7、8区荒掘り。7区で井戸跡検出。1～6区精査、サブトレンチの掘込みおよびセクション実測。9、10区の荒掘り。
- 10月11～16日 6、8、10区精査、遺構検出。1、3～5区のサブトレンチの掘込みおよび精査。2区SK03半裁、青銅製の碗出土。
- 10月17～19日 7区の井戸の水抜きおよび旧表土面の検出。3区の遺構および石列の検出。6～8区の遺構検出。2区SK03の平面実測。
- 10月20日 鈴木啓先生来跡指導。7区井戸関連の建造物の検出および10区における礎石立建物の検出についての指導を受ける。
- 10月23～24、26～27日 6～8区遺構面の検出および精査。
- 10月30～31日、11月3～4、6日 6～8、10区の遺構検出、半裁、セクション実測。
- 11月7日 鈴木啓先生来跡指導。
- 11月8日 田中正能先生来跡指導。
- 11月9～10、12～13日 1～4区清掃。6～8、10区の遺構検出、半裁、セクション実測。
- 11月14日 写真測量。
- 11月15日 遺構の埋め戻し。機材撤収。
- 11月22日～12月1日 埋め戻し。



第3図 遺構配置図(番号はピット番号・アルファベットは第4図の断面図の記号と対応)

[1区 北壁セクション]

[2区 北壁セクション]-317.9m



第4回

調査区断面図(図面中のセクションポイントの記号は第3図中の記号と一致する)



第4節 調査方法と概要(第3・4図)

当平場は本丸の位置する三角錐状の独立丘陵の西辺にあたり、本丸より一段低く、その比高差は約28mを測り、東西ともに急峻な崖面となる。東西幅約12~20m、南北約130mの細長い帶郭状を呈し、全体的に平坦であるが、東から西へ緩やかに傾斜している。東から延びる緩やかな尾根により、中央で南北2つの地区に区分された状態であることから、平成12年度は北地区を中心に発掘調査を実施することとした。

掘立柱建物跡2棟、溝跡4条、土壙7基、敷石遺構1基、石列2条、井戸跡2基、ピット78基が検出されている。

これらの遺構はほとんどが平場の東側、特に後述する6区に集中する傾向が見られた。また、ほぼ中央から西半部は地山が急激に落ちていく様子が観察でき、現況の平場は昭和40年代の公園整備の際に、東側を削平し、その土を西側に盛って整形した地形であることが判明した。なお、旧生活面においても自然地形に盛土をして若干の平場を確保したことが確認でき、その幅は広いところで5m程度であることが確認された。したがって、主要な遺構は西側に集中し、しかも削平を受けているため保存状態が悪い。

基本層序は6層でL1:工事盛土層、L2:茶褐色土層、L3:グライ層、L4:整地盛土層、L5:整地層、L6:地山層(山砂)の順に堆積するが北側ではL6は火碎流土層の部分も見られ、複雑である。全体としてはL4、5層が旧生活面と捉えられ、L5は平坦面をもつがL4は中央から西へ傾斜している。

調査は任意に調査区を設定し実施している。南北に長い調査地であるため東西に2つ、南北に5つに区分した。北西部を1区、その東側を2区、1区の南側に3区、その東側が4区、3区の南側を5区といった順番で10区まで設定した。しかし調査の状況から3・5・7区については一部のみを調査し、9区は調査を実施しなかった。

第3章 調査結果

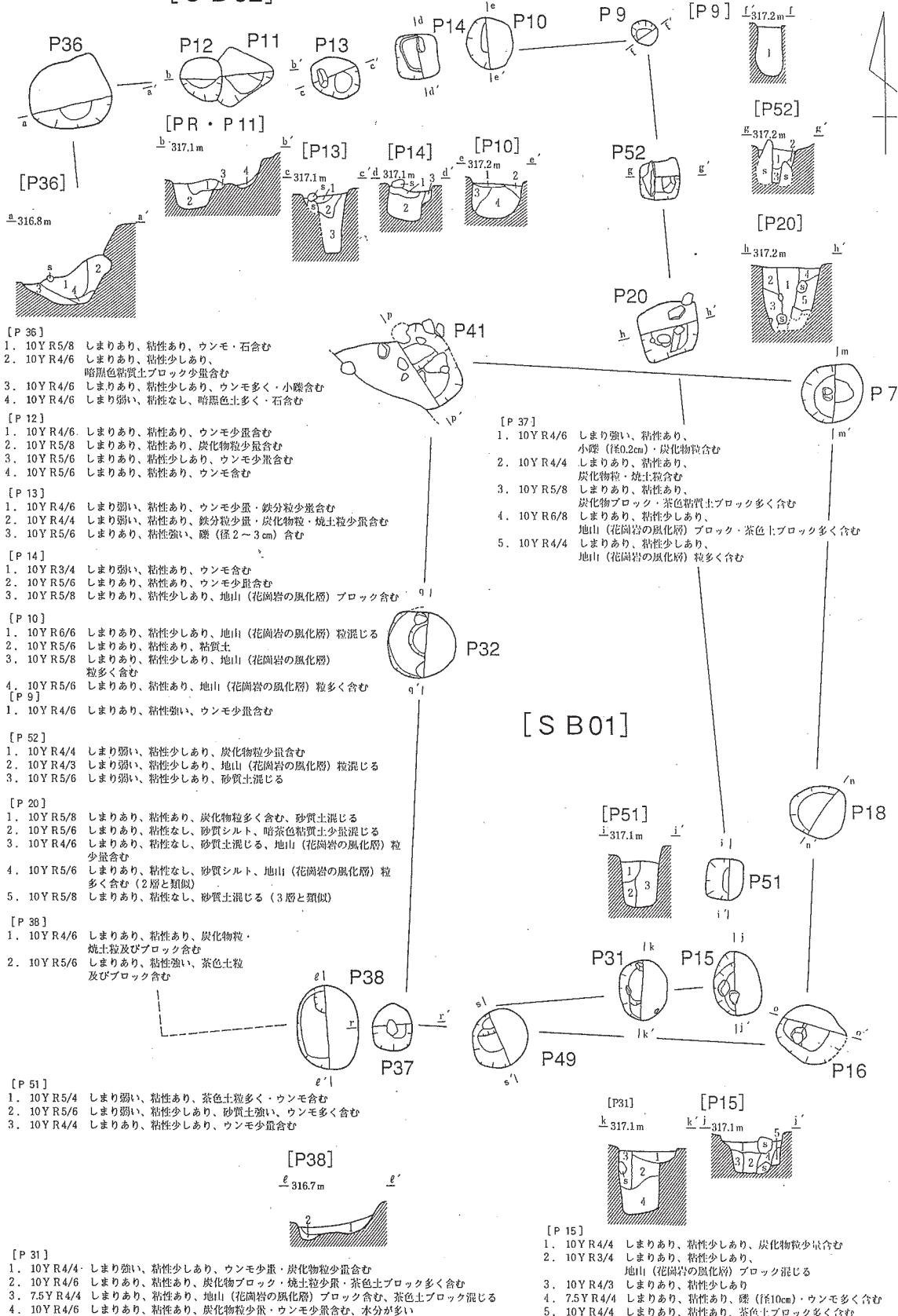
第1節 遺構と遺物

(1) 掘立柱建物跡

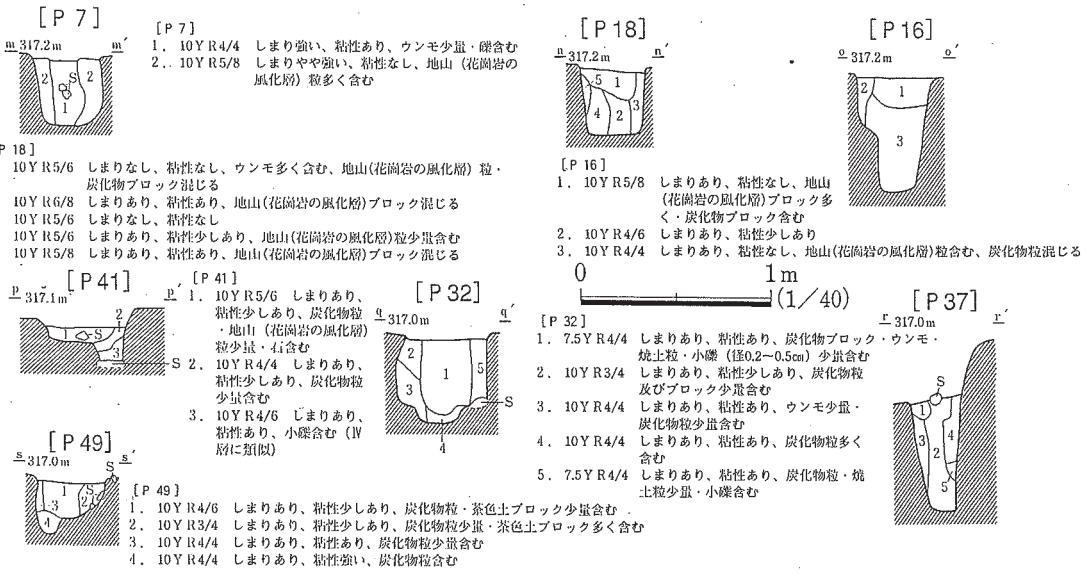
SB01(第5~7図、図版1)

6区に検出された桁行2間梁行1間の掘立柱建物跡である。南北4.5m、東西2.7mを測る南北棟である。桁行の柱間は北から1.8、2.7mを測り、東辺は2.7、1.8mとなるが、東辺ではSK06によって柱穴が破壊されている可能性も考えられる。当該地区は地表面からはおよそ東端で5cm、西側で40cmを測ってL6に達し、地山が東から西へ向けて緩やかに傾斜している。したがってSB01の柱穴はいずれもL6が検出面であるが、南西隅のP37だけが、急激に落ちる地山を整地したL5から検出されていることとなる。したがってこの部分のみが不安定な地盤に建築されている。

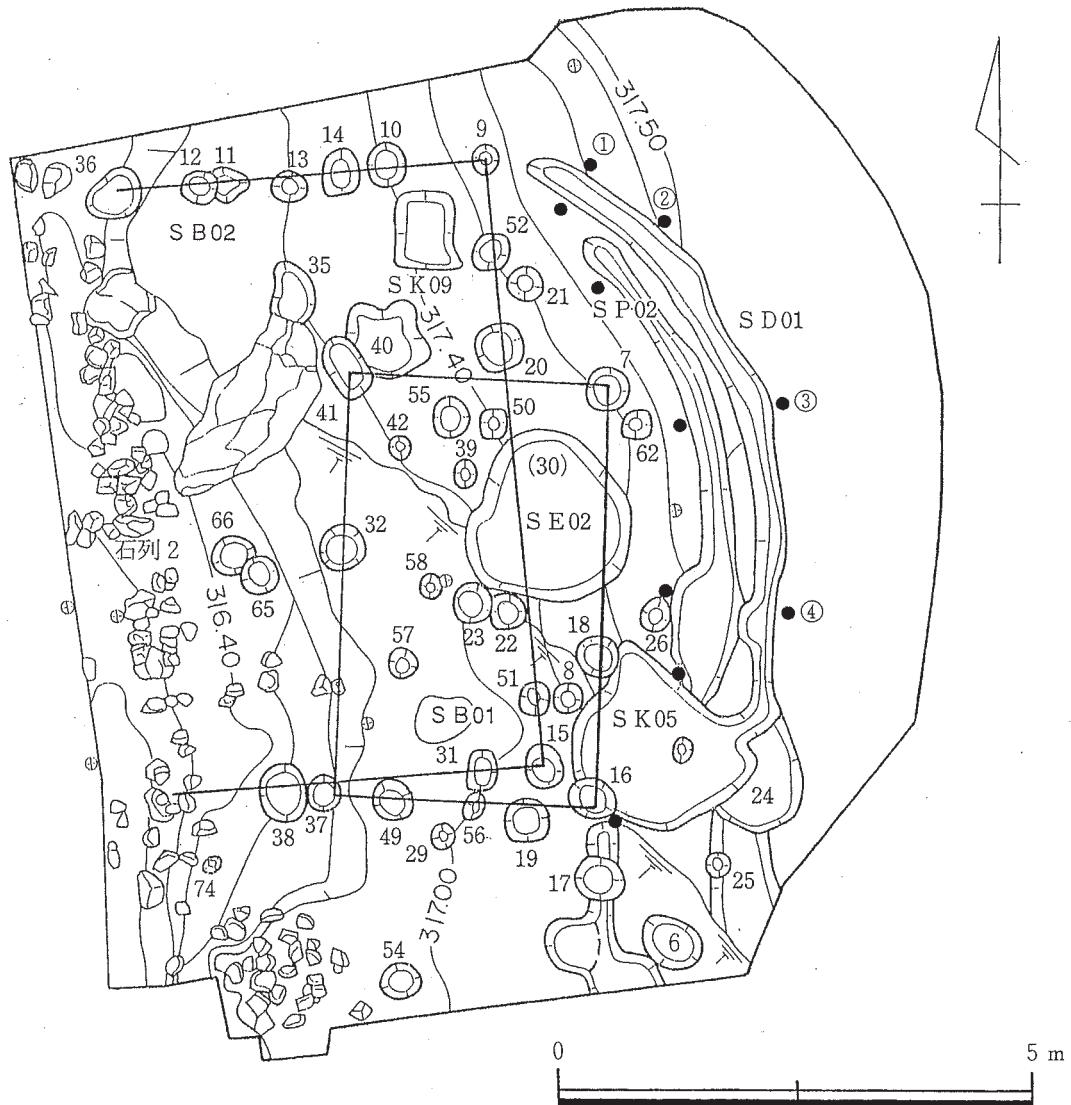
[S B 02]



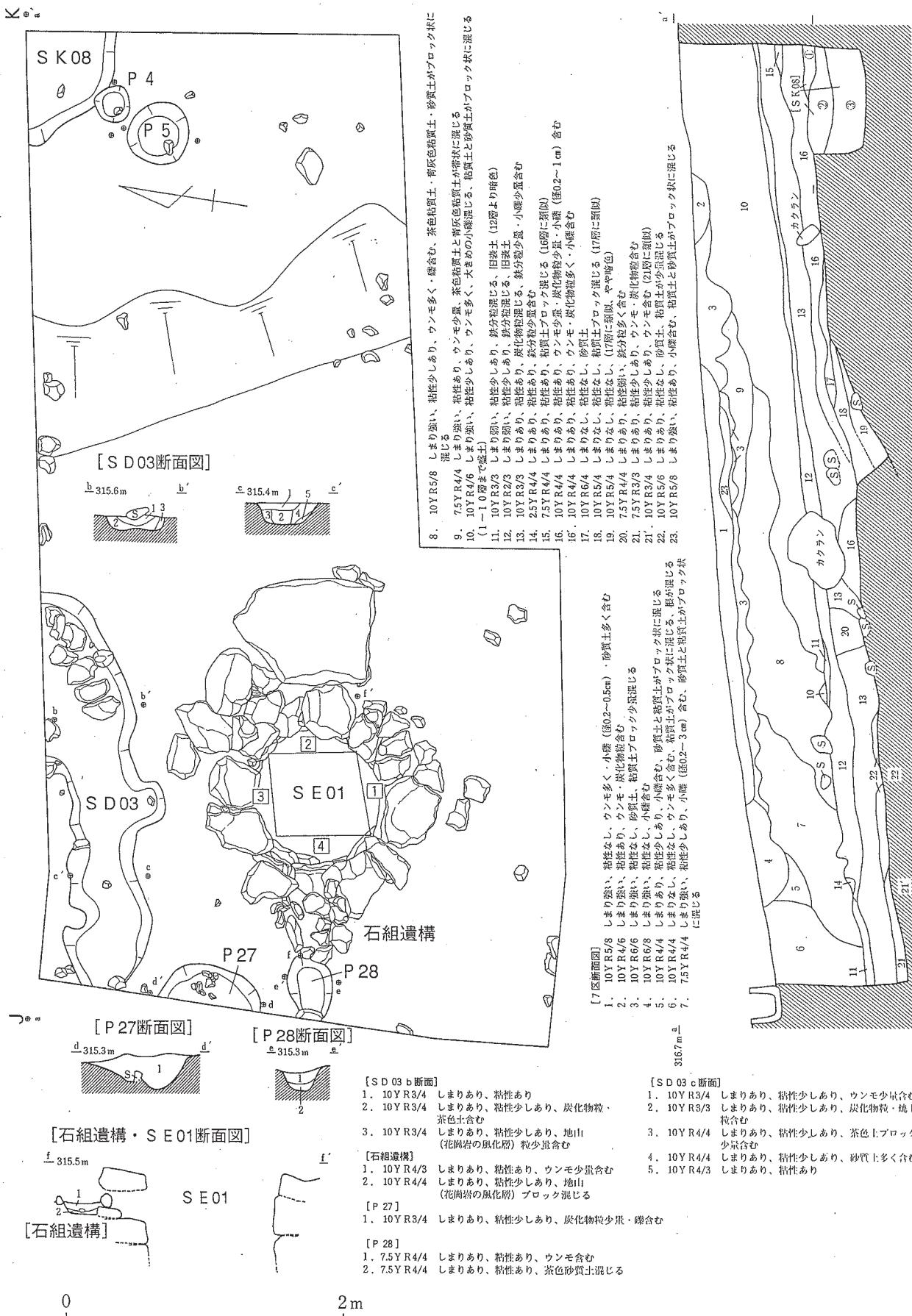
第5図 S B 01・S B 02平面図およびS B 02断面図



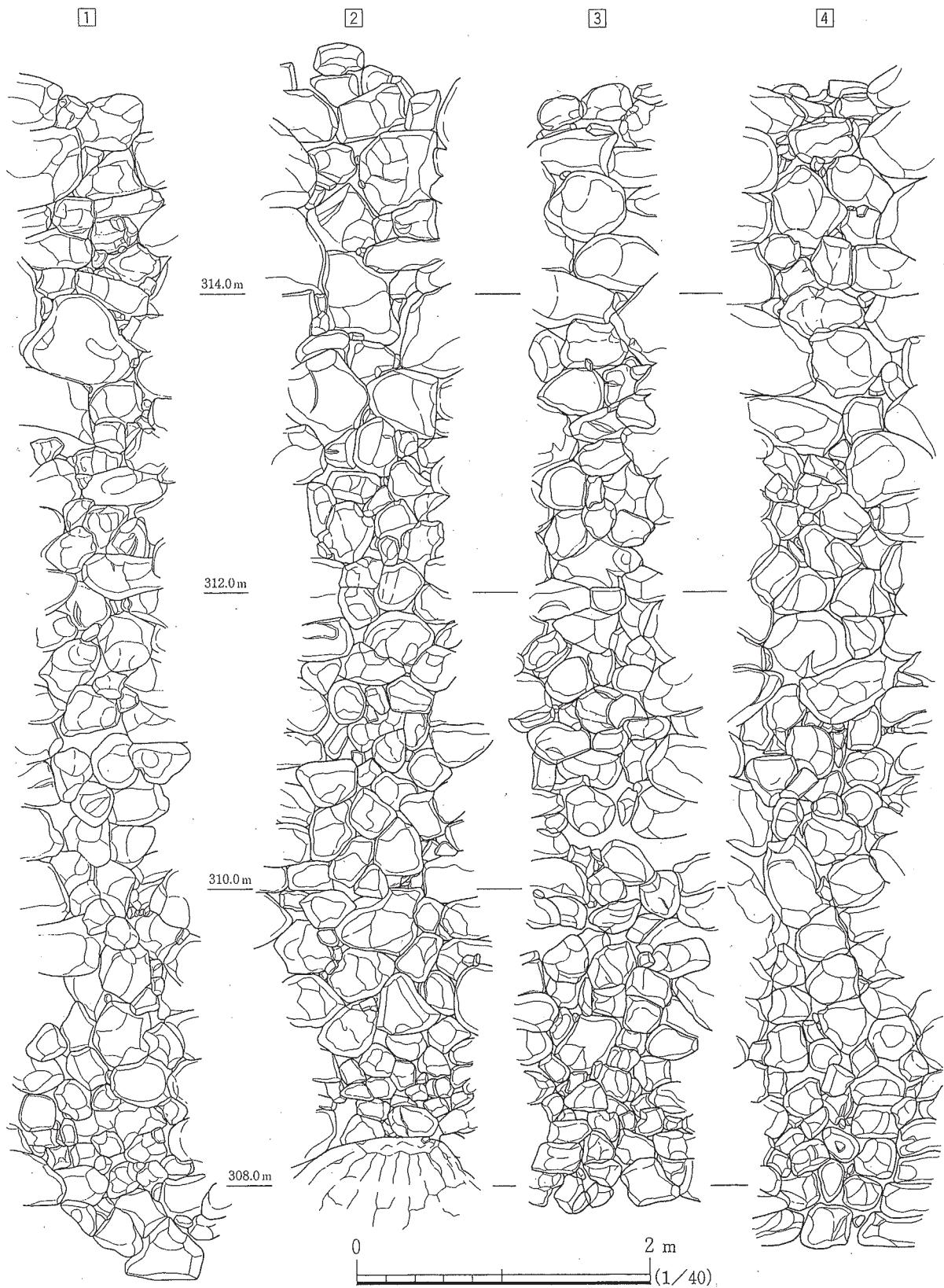
第6図 S B01断面図(P37の注記は第5図に記載)



第7図 6区遺構配置図



第8図 7区平面図および断面図(SK08の土層注記は第17図に記載)



第9図 S E 01内部石垣立面図(数字は第8図のS E 01平面図内の数字と対応する)

いずれの柱穴からも遺物が検出されていないため、時期・性格ともに不明であるが、その規模から仮小屋的なものであった可能性が考えられよう。

S B 02(第5・7図、図版1)

6区中央に検出された $6.4 \times 3.9\text{m}$ を測る南北棟の掘立柱建物跡である。東辺及び南辺がS B 01と重複するが、新旧関係は不明である。また、西辺にピットは検出されておらず、掘立柱建物跡ではない可能性も考慮すべきであろう。西辺が存在すべき地点は大きく傾斜しているため、この地形が本来のものであるとすれば、こうした不安定な地区に建築した可能性は低いものと考えられる。しかしこの傾斜の底で西辺にあたる部分には、後述する石列2が配されているため、これが柱の基礎を補強するものであった可能性も考えられる。柱の配置は不規則で、梁行北辺は4間で東から0.9、1.2、0.9、0.9m、桁行東辺は4間で北から0.9、1.2、3.6、0.9mを測る。やはりSK 06によって東辺の柱穴が削平されている可能性がある。梁行の南辺は3間で0.6、0.9、1.2m、全体で2.7m確認されている。

出土遺物はないため、当該遺構の時期は不明である。また、その機能についても建造物であるか否かを含めて検討の余地がある。あるいは北辺のみが柵列跡であった可能性も考えられる。

(2) 井戸跡

S E 01(第8・9・20図、図版2・8)

7区西端に検出された遺構である。現地表面から約1mを測って検出面に達する。昭和期の盛土の際に上部に高さ0.9mのコンクリート製の井戸枠を乗せて埋設し、さらにコンクリート製のフタをした状況であった。現況では埋没していたため、今回の調査で改めてこの井戸の存在を確認することができた。この井戸は昭和30年の新聞に再発見されたことが報じられている。この記事によれば昭和15年の陸軍作成の地図では存在が知られていたらしく、その当時からトックリ井戸と呼称されていたことが伝えられている。

井戸は自然石を用いた石組みの井戸で、雨水が浸透して溜まる井戸のようである。平面形はほぼ円形であるが、径 $0.92 \times 0.85\text{m}$ を測り、厳密には北東から南西に長軸をとる橢円形を呈している。深さは約7.95mを測り、内部はすべて花崗岩や安山岩の自然石を用いて積んでいる。上部は径40~50cmの石を用いるが、下部は径30~40cmのやや小さめの石を用いる傾向にある。また、井戸底部は南北 $1.4 \times$ 東西 1.3m を測る円形で、東側は花崗岩の天石にぶつかり、西側へ傾斜して、L6に達している。検出面より約3.95m下の地点から径を広げ、上部より径の大きい底面に達する形状が観察され、過去にトックリ井戸と呼称されていたのはこのためであろう。

今回の調査範囲では井戸周辺に当遺構の“ほりかた”を確認することはできなかった。このことは、地形が東から西へ傾斜していることを考えると、井戸を構築する際の地表面はより下方にあり、盛土をしながら石を積んで井戸を形成したものと思われる。また、井戸の東側には $65 \times 97\text{cm}$ の平坦な石が上面を水平にして検出されている。これは水をくみ上げる際の足場石とみられ、井戸跡に伴うものと考えられる。ただし、近世の絵画資料によれ

ば洗濯石との解説がみられ、平場の性格を考えるうえでも検討を要しよう。なお、井戸の上端の石はこの石より一段低く、本来はもう一段積石があった可能性が考えられる。コンクリート製の井戸枠は数個の石で外側から押えた状況であったが、これらの石が井戸を破壊して用いたものかは不明である。西側には連続して石組遺構およびP28が配置されている。これは井戸の排水に関連した施設と捉えることができる。

出土遺物はなく、時期は不明であるが、石の積み方が本丸西側二段石垣の石積みの様相と類似していることから、これと同時期、すなわち慶長期の遺構と考えている。したがって、この時期、本丸への給水はこの井戸により行われていたものと考えられる。ただし、検出面を同じくしている S D03から丹羽氏の家紋の入った軒丸瓦が検出されており、丹羽氏時代にもこの井戸を利用していた可能性がある。

また S E01周辺からは釘 1 点(第20図 4、図版 8-4 d)が検出されている。

S E02[S K06として検出](第10図、図版 1-3・7-3)

6 区中央東よりに検出された遺構で、S B01、S B02と重複して営まれている。土壌として検出したが、その形状から井戸跡として報告する。平面形は長径約1.72mを測る不整円形を呈し、ほぼ垂直に落ちて直径約1.25mの円形の底面に達する。深さは約2.33~2.57mを測り、内面は平滑で、底面は南方へ傾斜している。北側の壁が崩れていることから、井戸を掘削した当時、作業中は北側から出入りしたものと想像される。下部は人為堆積とみられ、粘性の強いオリーブ色がかった黒色土(20層)が約75cm堆積している。その上部には地山が崩れた層(17~19層)が堆積し、粘性の強い黄色がかったシルト層(15層)が堆積していることから、20層を埋めた段階で開口していた期間があったものとみられ、15層が水底に沈殿したような土であることから、井戸として機能した可能性も考えられる。しかし、この遺構は水が湧く状況ではなく、上部の埋土も地山ブロックを多く含むことから、掘削後あまり時間をおかずには埋め戻された可能性が高い。

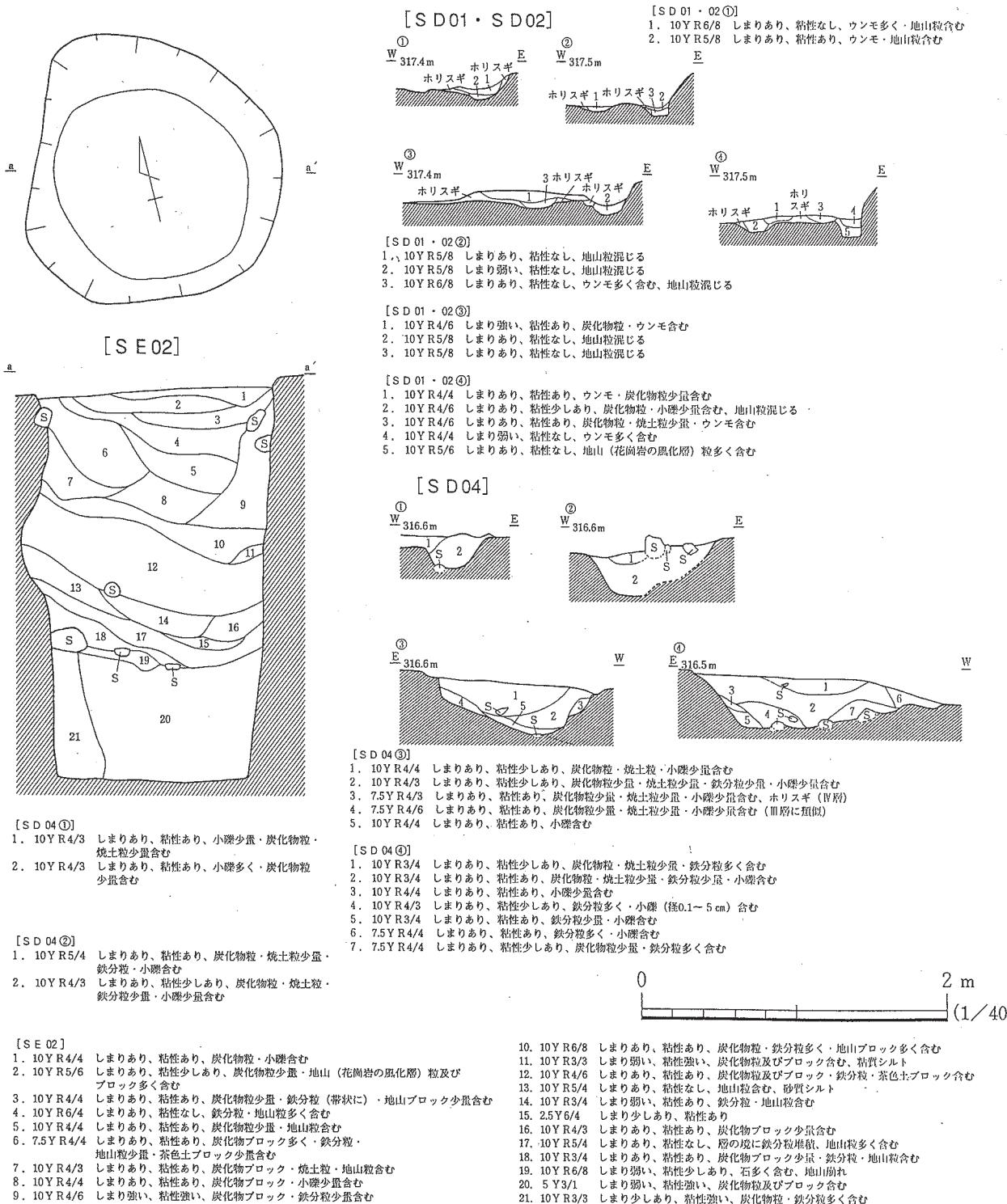
出土遺物(図版 7-3)は上層より炭化材、礫 2 点、素焼きの坏片 1 点(図版 7-3 b)、陶磁器片 1 点(図版 7-3 c)が検出されている。礫のうち 1 点(図版 7-3 a)は火を受け炭が全面に付着した状態で出土している。また、20層からは素焼きの土器片 2 点、扁平な直方体状の礫 1 点(図版 7-3 d)が検出されている。土器片は須恵器状のものが 1 点(図版 7-3 e)、陶器が 1 点(図版 7-3 f)であるが、いずれも時期が不明であるが、20層が埋まった状態で開口していた時に流入したものと判断される。

また、1.5m 南西には前述の S E01 が存在していることから、S E01 と同時期には機能していなかったものとみられる。S E01 は最近まで開口しその存在が知られていたことから、井戸として掘削したのであれば、S E01 以前の遺構である可能性が高く、湧水しないために埋め戻されてしまったのではないだろうか。

(3) 溝跡

S D01(第3・7・10図、図版 1)

6 区東端の傾斜面が平坦になる境に検出された溝跡で、南北に長く S E02 を囲むように



第10図 S E 02平面図および断面図、S D 01・S D 02・S D 04断面図

弧状を呈し、S E02から約1.4m東側に位置する。上幅40~20cm、下幅25~10cm、深さ15~10cmを測り断面形は西側が崩れた箱形を呈する。東側は地山を垂直に切り込んで溝を整形していることがうかがえる。この地区は削平されていることが予想されるため、溝は本来もう少し深さがあった可能性がある。長さは約7.3m確認されているが、南端はS K05に壊され不明である。またP24と切り合い、これよりは新しい。出土遺物はない。

その機能は明確ではないが、東側の斜面の地形に沿って當まれていていることから、斜面からの雨水を受ける排水機能が考えられる。したがってこれにより囲まれた6区は生活空間と考えられ、建造物が存在する可能性が高い。こう考えると当遺構はS B01かS B02いずれかに伴う可能性があるが、S K05とP16、18の関係からS B01はS D01より新しく、S B02に伴う可能性がある。ただし、S D01に溜まった水の排水先が不明であるため、排水溝とは断定できない状況にある。

S D02(第3・7・10図、図版1)

S D01と平行してS E02を囲むように弧状を呈して検出された遺構である。S D01よりは約60cm西側、すなわち内側のS E02よりに位置し、延長は5.1mとやや短い。上幅は25~30cm、下幅10~13cmを測り、深さは約6~8cmを測る。断面形は上幅が大きく開いた台形で、場所によっては皿状を呈する。やはり南端をS K05によって破壊されているため全長は不明である。削平されている可能性があるとはいえ、断面図からもS D01より掘り込みが浅かったことがわかる。遺物は検出されていない。

このように時期、性格ともに不明であるが、その形状からS D01と同時期、同機能である可能性が考えられる。

S D03(第8・18図、図版2・5)

7区に検出された北東から西へ延びる溝跡である。前述したS E01の北側に位置し、5層上面で検出された。確認長で2.6m、西端は調査区外のため不明であり、東端はやや北側へカーブし、北および北東へのびる状況であるがトレンチ壁のため未確認である。上幅約44cm、下幅約25~30cm、深さ約10~15cmを測り、断面形は台形を呈するが全体の形状は不整形である。東側には長径25cm前後の礫が5個、溝内上部に溝の形状に沿って並んで検出され、この付近から後述する軒丸瓦片1点が検出されている。堆積土は砂質土を多く含むため、流水する状況にあった可能性が考えられるが、井戸を移築する際につんだとみられる周囲の盛土にも砂質土が多く含まれることから、明確ではない。

遺物は遺構上層から軒丸瓦片1点(第18図1、図版5-1)が検出されており、丹羽氏の家紋である直違文がみられる。直径約11.2cm、厚さ2.4cmで灰黒色を呈する。型押しとみられ中央に直違文、縁辺部に直径5mm程度の紐が6個確認されている。周囲には粘土貼付けのための刻みがみられ、裏面にはナデの痕跡がみられる。また、陶器の高台部分(第18図2、図版5-2)が検出されている。底径6.4cmを測り、黄白色の釉には嵌入が見られる。高台内部まで釉が施されている。器形等は不明である。

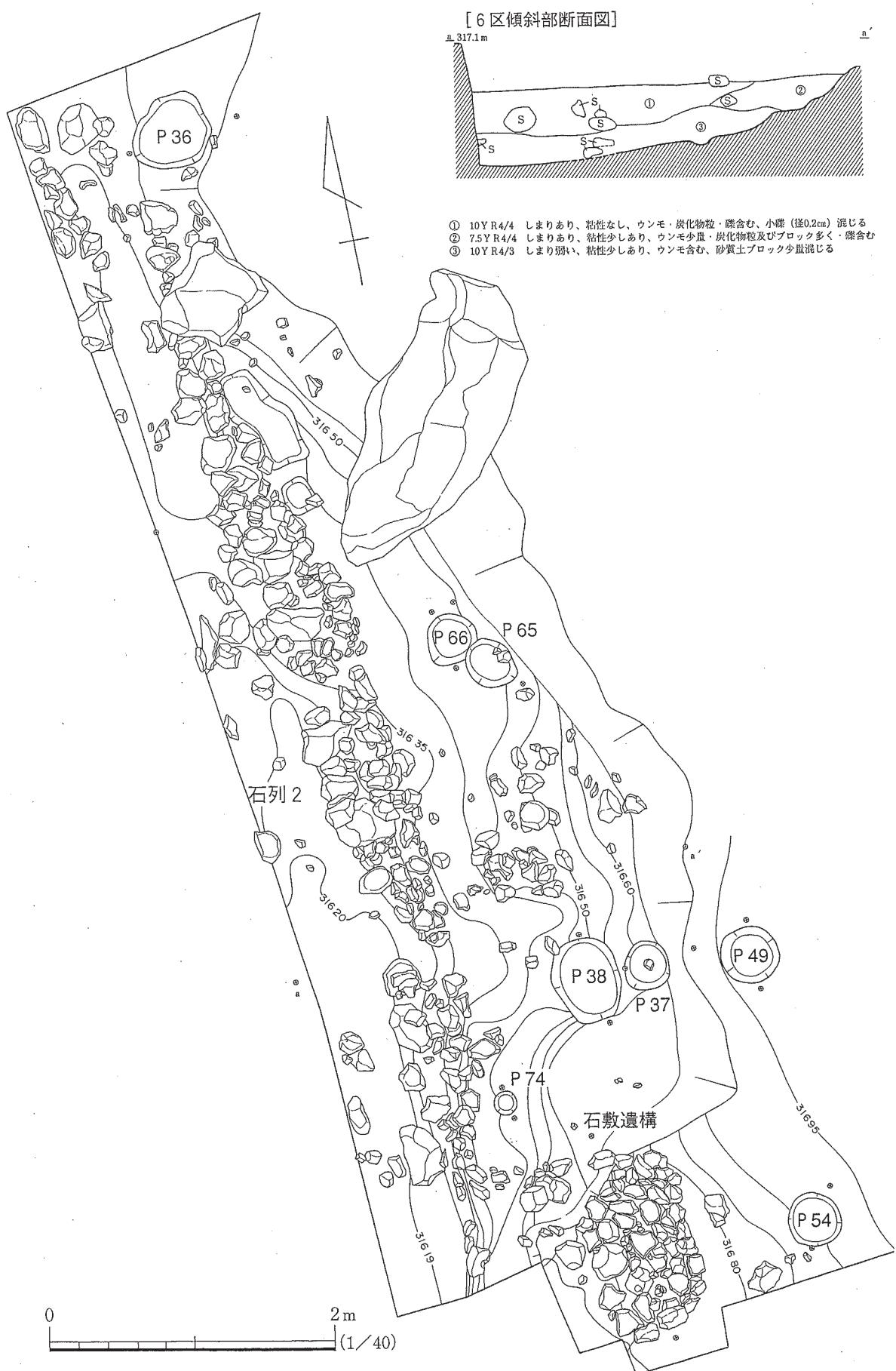
これらのことから、当遺構は丹羽氏時代に属するものとみられるがその性格は明確では

[1・3区 東西ベルト断面]

1. 10Y R5/6 しまりあり、粘性なし、ウンモ多く、地山粒及びブロック多く含む、暗茶色粘質土を混じる
2. 10Y R4/4 しまり強い、粘性あり、ウンモ少々、火砕流礫少量含む、粘質土、下方に鉄分粒が多い
3. 10Y R4/6 しまり強い、粘性少しあり、ウンモ多い、鉄分粒含む、砂質土と粘質土がブロック状に混じる（砂質土が多い）
4. 10Y R4/6 しまり強い、粘性あり、ウンモ含む、鉄分粒混じる、砂質土と粘質土がブロック状に混じる（粘質土が多い）
5. 10Y R4/3 しまりあり、粘性強い、ウンモ・鉄分粒多く含む、砂質土多い
6. 10Y R3/3 しまりあり、粘性強い、鉄分粒多い、火砕流小礫含む（5層と類似するが砂質土少ない）
7. 10Y R4/3 しまりあり、粘性強い、鉄分粒・火砕流小礫含む、上部に植物質が多い
8. 10Y R4/4 しまりあり、粘性強い、炭化物粒・鉄分粒・火砕流礫含む
9. 10Y R3/4 しまりあり、粘性弱い、炭化物粒・鐵（鉄分粒）、火砕流の小ブロック少量含む
- 9'. 10Y R4/6 しまり強い、粘性あり、鉄分粒・火砕流小礫、赤茶色粘質土・ブロック多く含む
10. 10Y R4/4 しまりあり、粘性あり、ウンモ・炭化物粒少量含む、火砕流ブロック、黒褐色土ブロック・山砂ブロックがモザイク状に混じる
11. 2.5Y4/4 しまり弱い、粘性あり、ウンモ多く・山砂ブロック多く含む、火砕流ブロック混じる
12. 10Y R4/4 しまりあり、粘性あり、炭化物粒多く・鉄分粒少量・遺物含む
13. 10Y R4/4 しまりあり、粘性強い、炭化物粒及びブロック多く・鉄分粒含む、粒子が細かい
14. 10Y R4/6 しまりあり、粘性強い、黄色の火砕流ブロック多く混じる（9'層の崩れか）
15. 7.5Y R4/4 しまり強い、粘性あり、ウンモ・炭化物粒・鉄分粒多く含む（14層に類似）



第11図 石列1平面図および1・3区東西ベルト断面図



第12図 石列2平面図および6区傾斜部断面図

ない。S E 01に伴う施設であるか否かも不明である。また、このような軒丸瓦自体の発見例が希少であり、細かな編年がなされていないため、詳細な年代を決定し得ない。

S D 04(第3・10・18・20図、図版3・5・8)

10区に検出された南北に延びる溝跡である。確認長で9mを測り、南端は調査区外のため不明であり、北側は10区と8区の間のベルトにかかり、8区側では検出されていない。上幅は約0.42~1.64m、下幅0.2~0.4m、深さは0.2~0.3mを測り、南から北へ向かうにつれ、幅が狭くなり8—10区間のベルト内で消えてしまうようである。なお、断面は台形を呈するが、いずれも西側に崩れている様子が観察される。これはこの遺構が旧地形の平坦面(4層)が傾斜しはじめる地点、すなわち旧地形における自然地形と盛土(5層)の境に位置することと関連しよう。おそらく、当遺構は溝跡ではなく、平坦面をさらに確保するために4層の上に5層を盛土した際に生じた段差に盛土とは質の違う土が堆積したために溝状に検出されたものとみられる。このことは、10区でみられた溝跡の東側の上端ラインが、そのまま8区における傾斜変換線につながる状況からも裏付けられよう。

遺物はすり鉢片(第18図4、図版5—5)1点、磁器片2点、砥石1点、円板状石製品(第20図15、図版8—3)1点である。円板状石製品は直径3.0cm、厚さ7mmを測る。用途は不明である。磁器片のうち1点は唐津の小片である。第18図4はすり鉢の底部片で底径11.4cm、残存高6.1cmを測る。岸窯のすり鉢に類似するが明確ではない。他に釘1点(第20図1、図版8—4 e)、不明鉄製品1点(第20図11、図版8—4 k)が検出されている。後者は長さ31cm、重さ84.7gを測る。先端がかけているため全長は不明である。直径1.1cmの棒状を呈するが、先端へ向かうにつれ細くなり、断面形は1辺0.7cmの正方形に変化する。用途等は不明である。

以上のことから、この平場を盛土して利用したことが明らかとなったが、その時期は特定できなかった。

(4) 石列遺構

石列1(第11・13図、図版3・6)

1—3区間の5層上面で検出された東西に長い石列である。当初3区のサブトレントに検出されたため、その延長を確認するために1区にもサブトレントを拡張した。約6m確認されているが東端、西端ともにその延長は不明瞭である。特に西端は石が小型化するため石列として認識すべきか判断に迷う状態にある。長径20~40cmの石が一列に並んで据えてあるが、西端は前述のように大型の石ではなく、大型の石を据えるために配された小礫である可能性が考えられた。材質は様々で花崗岩、玄武岩、火碎流礫などが見られる。レベルは西へ向かうにつれ下がり、地形に沿っていることがわかる。石は特に南北どちらの面も揃えておらず、区画のためであってもその目的は不明である。

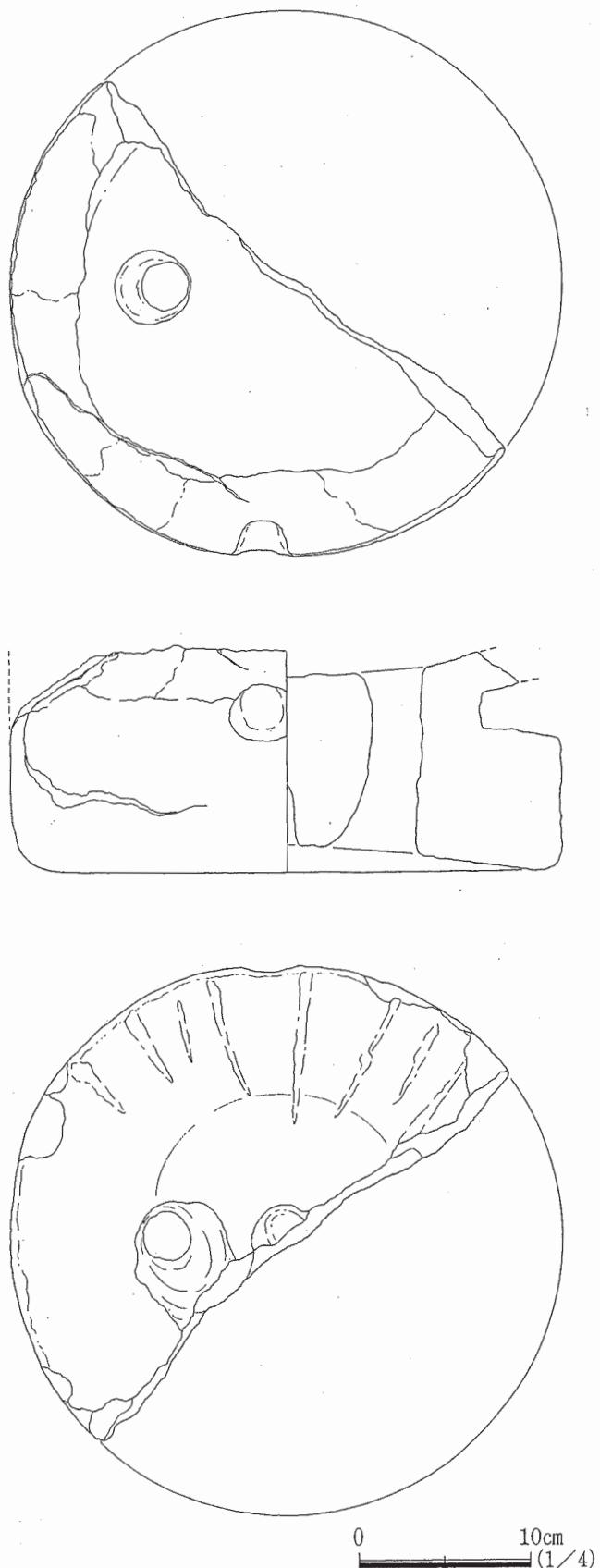
出土遺物もなく、時代、性格ともに不明の遺構である。なお、この石列中央部より南側に約50cmの地点から、石臼片(第13図、図版6—9)1点が検出されている。供給口と挽き木穴を遺存する上臼片で、上縁部がすべて意図的に打ち欠いてある。

石列2(第12・18・20図、図版3・

5・7・8)

6区に検出された南北につながる石列である。約8m確認されているが南端および北端については未確認である。6区は東側から約4~5.5mの地点までは地山および5層により平坦であるが、そこから東は急激に傾斜し、その比高差は約3mの間に約75cmを測る。当遺構はその傾斜地に堆積する③層上面に造られており、礫上面は平坦面から約60cmの深さに位置する。礫は長径約40cmを測るものもあるが、ほとんどは長径20cm前後のものを用いて幅60cm程度に配置している。③層はグライ化しており旧表土面(基本層序のL3層)と判断されよう。

石列周囲の傾斜地内からの出土遺物を概観する。③層から相馬産の碗1点(第18図3、図版5-4)、すり鉢片2点(図版7-1b・c)、底径16.8cmを測る素焼きの鉢の底部片1点(図版7-1a)、陶器片1点(図版7-1e)、不明石製品1点(図版7-1d)、①層よりすり鉢片1点(図版7-1f)、陶器片1点が検出されている。陶器片はいずれも小片であり詳細は不明である。③層のすり鉢片の内1点は岸産で、その特徴から他のすり鉢片および素焼きの底部片はいずれも岸産と見られる。相馬産の碗は底径3.41cm、復元口径は8.83cmと小型であり、内外面ともに施釉されるが高台および高台内は無釉である。また、③層からは不明銅製品1点(第20図12、図版8-1b)が検出されている。飾り金具の可能性が高い。



第13図 石臼実測図

このように時期的には17世紀後半に限定されるとみられ、この地区が整地された時期が類推される。しかし石列の機能は明確ではなく、土留め、あるいは区画を目的としている可能性が考えられるが、いずれも根拠は稀薄であり、性格不明とせざるをえない。

(5) 石敷遺構(第14図、図版3)

6区の南東隅に検出された遺構である。石列2で前述した傾斜変換線の落ち際、平坦面側に検出されている。1.32×0.86mの東西に長い小判型に礫を並べ、内部には平坦な石を敷き並べている。東側は原形を保っているが北西側はやや搅乱を受けている。内部の平坦面はほぼ水平で、周辺を取り囲む石より10cmほど低い。

出土遺物はなく、時期は不明であり、遺構の性格も不明である。類似した遺構は、当城址の平成11年度の調査の際に検出されているが、この場合は、平坦面の石は大きく、火を受け、焼土および炭化物が堆積していた。したがって当遺構とは様相を異にするため、比較することは難しく、その機能は明確ではない。

(6) 石組遺構(第8図、図版2)

7区、SE01の西側に隣接して検出された遺構である。SE01の周辺では最も低い部分に位置する。深さは約15cmで東西61cm、南北47cmの範囲を囲むように石をU字形に並べ、井戸側が開口している。東側20cmほどはSE01を構成する石と重複しており、また石組遺構の上部にもSE01を構成する石が蓋をするように据えられていた。したがって当遺構はSE01が満水時にあふれることのないように、水位を一定に保つ排水機能を有していたものと思われる。しかし、西側はU字形に閉じているため、全くの排水路とはいひ難く、その機能についてはさらに検討を要する。

また、当遺構の西側に隣接してP28が営まれている。40×27cmの不整長方形を呈し、西端はトレーナー外のため不明である。深さは約15cmで断面形は台形を呈している。ピットとして扱ったが、あるいは西側へ続く溝跡である可能性も考えられる。その場合、石組遺構と連続して井戸の排水路を形成していた可能性が考えられよう。上層より小片だが磁器片1点が検出されている。

(7) 土壙

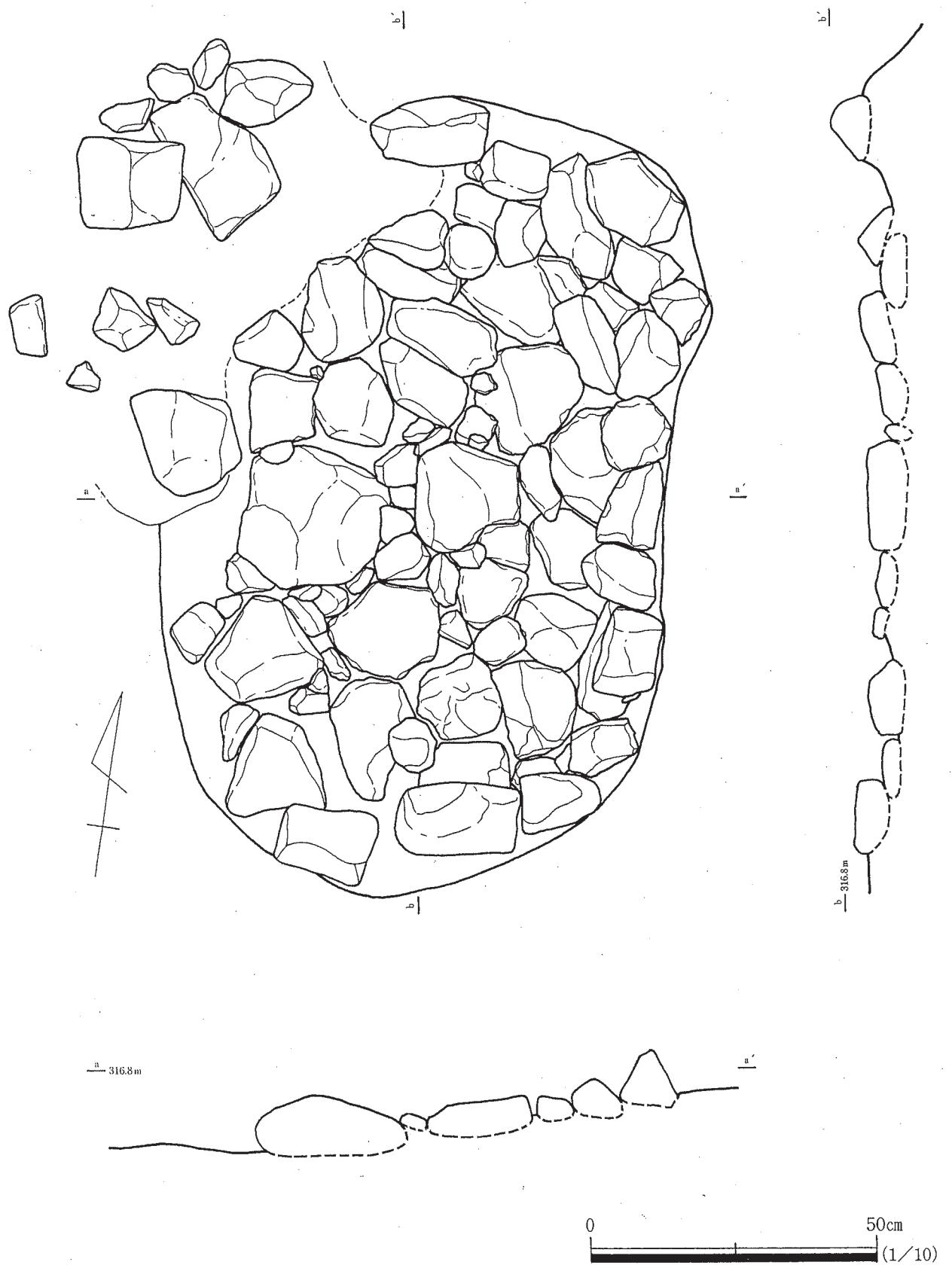
SK01(第16図)

2区に検出された遺構で、SK03の中央に重複している。長径225cmを測る不整形で、深さは35cmを測る。内面も凹凸が激しくカクランである可能性が高い。中央上部に径65cmを測る巨石がある。

SK02(第16・18図、図版5)

2区北壁際に検出された不整形の土壙である。確認長で径236cm、深さ30cmを測るが北半分はトレーナー外のため不明である。検出状況からカクランである可能性が高い。

出土遺物は底面より陶器の底部片1点(第18図5、図版5-3)が検出されている。底径6.0cm、残存高1.9cm、底面に回転糸切り痕を有し、内面には黒茶褐色の釉がみられる。外面にもわずかながら、流し掛けされた釉の痕跡がみられ、本郷産と推定される。



第14図 石敷遺構平面図および断面図

S K03(第15・16図、原色図版2、図版4)

2区で検出された不整円形の土壙である。中央部をS K01により壊されている。径430cm、深さ約35cmを測り、内面はやや凹凸がみられるが、堆積土3層内および床面に径10cm前後の小礫が敷き詰められた状態で検出されている。

出土遺物は銅碗1点(第15図、原色図版2)、陶器片1点(図版7-2a)、磁器片1点(図版7-2b)が検出されている。陶磁器片はいずれも小片であるが、陶器は乳白濁色の釉が内外面とも施され、大きめの嵌入がみられる。銅碗は、口径6.1cm、底径3.2cm、器高2.95cmと小型で、厚さは0.5mm前後と非常に薄手である。その形態から仏前具の一つとみられる。時期は不明であるが、この遺構が宗教関係の機能をもつ可能性がある。小礫が密集している状況は基壇を築くための地盤改良を行った形跡と見ることができよう。あるいは、こうした宗教施設を建築する際に、土地を清浄化するために土の入れ替えを行うことがあるという。いずれにせよ当遺構は宗教施設である可能性が高いと判断された。

S K04(第16図、図版7)

3区で検出された土壙で北東部のみ検出されている。隅丸長方形を呈するとみられ、確認長で東西64cm、南北37cmを測る。深さは40cmを測り内面は平滑である。底部に長径15~20cmの礫が3個検出されている。

出土遺物は瓦片1点(図版7-2c)、土器片1点(図版7-2d)だが、時期・性格ともに不明である。

S K05(第3・17図)

6区南東隅に検出され、SD01、02、P24より新しく、P16、18より古い。したがってSB01よりは古く、SD01、02もSB01より古いことが明らかである。約1.7×1.5mの不整方形を呈し、深さは10cmと浅く、皿状を呈する。底面には中央やや東よりにピットが1基検出されている。1辺17cmを測る隅丸方形の平面プランを呈し、深さは5cmである。

S K06 S E02に変更

S K07 欠番

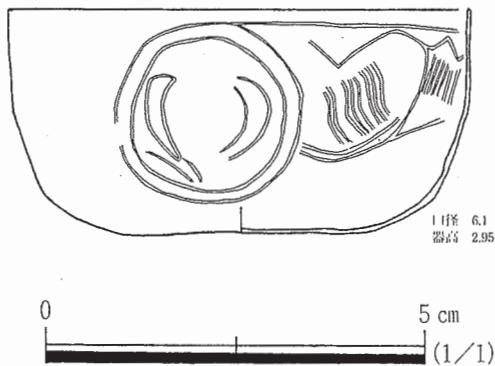
S K08(第8図)

7区、SE01より東へ5mの地点に検出された。南西隅のみ検出され、確認長で東西83cm、南北57cmを測り、平面形は楕円形を呈するとみられる。深さは42cm、壁面は垂直に落ちて平坦な底面に達する。P4と切り合い、これより古い。

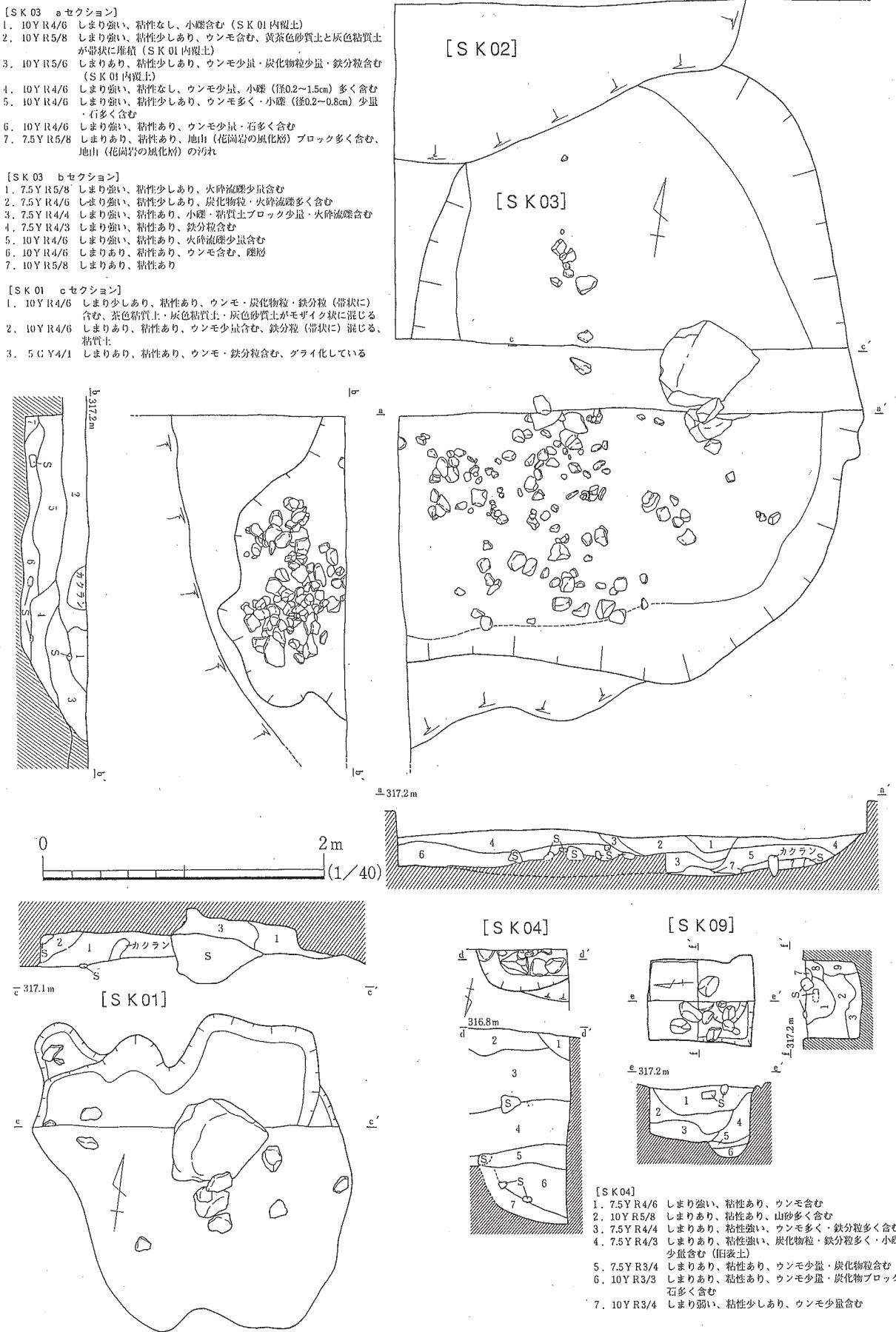
出土遺物はなく、時期・性格ともに不明の遺構である。

S K09(第16図、図版4)

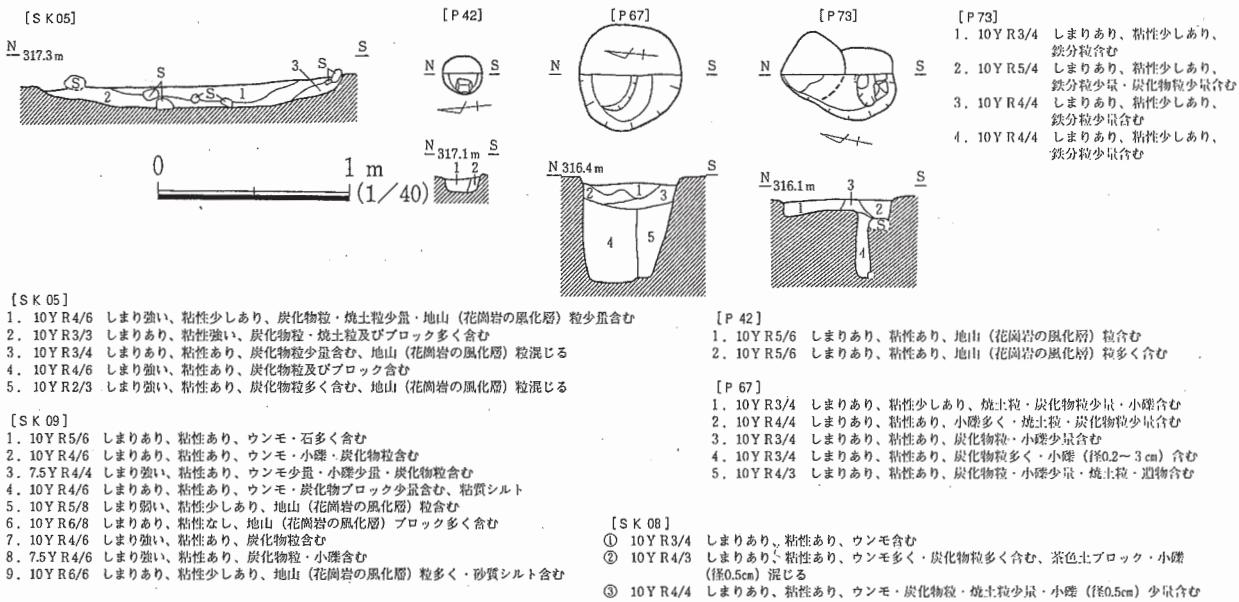
6区北側に検出された遺構である。南北75cm、東西57cmを測り、角のある長方形を呈す



第15図 SK03出土銅碗



第16図 SK 01・SK 02・SK 03・SK 04・SK 09平面図および断面図 (SK 09の土層注記は第17図に記載)



第17図 SK 05断面図・ピット平面図および断面図

る。壁面も平滑で垂直に落ち、約40cmを測って平坦な底面に達する。上面に径15cm前後の礫がみられる。また、主軸上の南側底部には直径30cmの円形のピットが検出されている。したがって、底部の最深部までは約51cmを測る。

出土遺物はなく、時期・性格ともに不明である。

(8) ピット(第17図・表1)

ピットはSB01、SB02を構成するものも含めて78基検出されている。ほとんどが6区において検出され、その他は少数であるが、4層上面で検出されることから、4層が平場を利用するために整地された層であることがわかる。その規模、形状等は表1にまとめたので参照されたい。なお、ピットに伴う遺物を概観する。

- P 1 素焼きの土器片2点小片であるが、近現代の植木鉢片であろう。
- P 2 瓦片1点、素焼きの土器片3点が検出されているが、P 1同様、近現代の植木鉢片とみられる。P 1・2はともに検出面が1層の盛土層であることから、昭和40年代以降に位置づけられることは明らかである。
- P 42 陶器片1点(図版7-2e)が検出されている。内外面ともに茶褐色の釉がみられるが小片であり詳細は不明である。
- P 67 かわらけ片1点(図版7-2f)が検出されている。
- P 73 陶磁器の底部片(図版7-2g)が1点検出されている。薄手で高台まで白色の釉がみられるが、畳付きの部分のみ釉がみられない。

第2節 遺構外出土遺物

(1) 陶磁器類(第18・19図、図版5~7)

遺物は、全体で整理箱(60×40×15cm)2箱と少ないが、6区および8区の出土遺物が比

較的多い。ほとんどが小片かつ磨滅しており、器種および時期・産地等を特定することはできなかった。また、後述するように図化できたもののうち数点は7区と8区の旧表土面で出土したものが接合され、さらに6区の地山直上と盛土層で出土したものが接合している。このことから旧表土面においても広範囲で搅乱を受けていること、さらに昭和40年代の工事の際に東側の地山面が削平・搅乱され、盛土されていることが明確となった。出土遺物の量が少ないとから、日常的に生活していた地区とはいいがたいが、すり鉢、砥石などが検出されることから、3層および4層上面が旧表土および旧生活面と考えられ、少なくとも17世紀後半頃は平場を利用していたことがうかがえる。したがって短期間ではあるが、生活空間であった可能性は高いといえよう。以下に区ごとに遺物を概観する。

1区 地山よりかわらけ片、染付2点が検出されている。

2区 遺物は出土していない。この地区は全面が地山であることからも、削平されているものと判断される。

3区 グライ化した3層より陶磁器片8点、土器片6点が検出されている。鉄釉のみられるものが1点(図版7-4a)、染付けのなされたものが3点(図版7-4b・c・d)みられる。土器片は器高5.5cmの円筒状を呈したもの(図版7-4e)が含まれる。同じ面よりプラスチックの破片が検出されていることから、旧表土面は昭和40年代の盛土がなされるまで旧表土面であったことが確認された。7層上面からはかわらけが1点出土した。磨滅しているが回転糸切り痕がわずかに観察できる。

4区 2-1層より磁器の碗1点(第18図6、図版5-6)が検出されている。底径4.4cm、残存高3.25cmを測る。疊付きを除いて全面に施釉され、染付けが見られる。産地不明である。他に2層からは染付けのなされた陶磁器片1点(図版7-4f)、土器片1点、7層上面からは青磁(図版7-4g)が1点検出されている。

5区 グライ化した3層より陶磁器片9点が検出され、内4点には染付けが施され、本郷産とみられるものが1点(図版7-4h)含まれる。産地不明であるが第18図8(図版5-7)は底径4.0cm、残存高3.85cmの陶器の碗であり、内外面とも淡青白色の釉が施される。4層からは土器片4点、陶磁器片4点が検出され、二重網目文のみられるもの(図版7-4i)、内外面とも鉄釉のみられるもの(図版7-4j)がある。7層からは陶磁器片2点が出土し、小片であるが锯齒状文(図版7-4k)が描かれている。

6区 5層より土器片1点、6層上面からはすり鉢1点、陶磁器11点、土器片9点が検出されている。土器片のうち2点は甕片とみられる(図版7-4m)。陶磁器片は相馬産(図版7-4l)のほか産地不明であるが、陶器の皿(第18図7、図版5-8)が検出されている。高台付近のみ残存し、底径6.7cm、残存高2.4cmを測る。疊付きを除いて全面に施釉され淡灰青色を呈する。内面に草花文が呉須で描かれる。これは小片となっており、一部は6区および5区の1層(盛土層)より検出されている。このため、6区東側の地山面が削平され、5区に盛土されたことがうかがえ、昭和40年代の工事の際、東側を削平して西側へ盛って平場を確保したことが裏付けられた。

7区 3-1層から陶磁器片2点、土器片1点、3-2層からは陶磁器片8点、土器片3点が検出されている。猪口型の碗(第18図9、図版5-9)を図示した。口径7.72cm、底径4.38cm、器高6.6cmを測り、高台際まで淡黄色の釉が施される。高台は外面では5.5mmを測るが内面は3mmと浅い印象を受ける。全体に細かな貫入がみられる。産地は不明である。これは4層出土の陶磁器片1点とも接合する。他に一重網目文(図版7-4n)、染付け(図版7-4o)、内外面ともに鉄釉のみられるもの(図版7-4p)などがみられた。3-3層からは平瓦1点(図版7-4r)が検出され、当地区で検出されたSD03出土の軒丸瓦の存在から、この付近に瓦葺の建造物の存在が予想される。他に3層からは陶磁器片3点、土器片1点が検出されている。陶磁器片は産地不明であるが萩産(図版7-4q)である可能性が高い。4層からは土器片5点が検出されているが小片かつ磨滅していて詳細は不明である。第18図10(図版6-2)はすり鉢の底部片である。内外面とも調整が荒く、内面の刻目はわずかに観察できるのみである。底径6.6cm、残存高4.6cmを測る。第18図11(図版6-5)は口縁の大きく開いた碗である。全体に施釉され、灰白色を呈する。貫入がみられ、口縁部外面には釉だまりが見られる。口径16.2cm、底径6.4cm、器高5.9cmを測る。産地は不明である。第19図1(図版6-1)はすり鉢の口縁部片で、口縁は内側に折り返し、岸窯特有の暗緑色の釉が施される。口径36.2cm、残存高11.4cmと比較的大きい。

8区 3-1層より陶磁器片2点、土器片4点が出土し、陶磁器片のうち1点(図版7-4s)は小片だが内外面に暗緑色の半透明の釉が施され、内面にランダムな沈線がみられる。3-2層からは陶磁器片6点、すり鉢を含む土器片5点(図版7-4u)、砥石1点(図版7-4v)が検出されている。陶磁器片には染付けのみられるもの(図版7-4t)のほか、碗2点を図示した。第19図4(図版6-3)は高台から底部のみ残存する碗である。釉の様子が第18図11に類似していることからこれと同様の器形を呈するとみられる。底径は6.2cmと第18図11よりはやや小さい。第19図3(図版6-4)は高台から底部のみ残存する碗で、底径6.1cm、残存高2.5cmを測る。全体に施釉され灰白色を呈する。第18図11、第19図4に類似した施釉であるが、貫入が黒ずんでないためやや外觀が異なる印象を受ける。器形はこれらと同様とみられる。その他3層からは陶磁器片11点(図版7-4w・x)、土器片13点、すり鉢2点、かわらけ1点(第19図5、図版6-7)が出土している。かわらけは底部付近のみ残存しており、底径6cmを測り回転糸切り痕を有する。なお、3層からは現代の陶器製の部品とみられるものが出土しており、3層直上まで搅乱を受けていることが明らかである。旧生活面である4層および5層からはそれぞれ陶磁器片1点、土器片1点、後者からは陶磁器片2点が検出されているが、小片であるため詳細が不明である。8区東方の崩落土内からは碗(第19図2、図版6-6)1点が出土している。畳付き以外は淡灰青色の釉が施され、外面には呉須で二重網目文が施される。口径10.2cm、底径4cm、器高5cmを測り、口唇に比して底部に厚みがあることが特徴である。肥前産であろう。

10区 4層から土器片8点、かわらけ(第19図6、図版6-8)1点、陶磁器片6点が出土している。陶磁器片のうち、唐津の小片1点、脚付鉢(皿)の底部(図版7-4g)1点、

暗緑色の釉が施されたもの1点(図版7-4z)等がみられる。また、接合しないが6区出土の皿(第18図7)と同一個体とみられるものがあり、広範囲に搅乱を受けていることが裏付けられよう。その他砥石1点、瓦片1点、すり鉢1点が出土している。5層からは染付けのみられる磁器片1点、すり鉢1点が検出されている。

(2) 銅・鉄製品(第20図、図版8、表2・3)

銅・鉄製品については、特徴ある遺物についてのみ下記に詳述することとし、その他詳細については、表2・3にまとめた。

第20図8(図版8-4h)は7区3-1層より出土したクサビである。刃先はかなり崩れているが頭部は使用痕が観察される。片面に格子状の刻目がみられる。

第20図2・3(図版8-4f・g)は7区1層から出土した。木片が付着し、丸釘であることから現代に属するものとみられ、1層が昭和40年代の盛土であることを裏付けるものである。

第20図10(図版8-4j)も7区1層から検出されたもので、大型のカスガイである。

第20図9(図版8-4i)は8区1層から検出された不明鉄製品である。残存長5.2cm、幅2.8cmを測り、両端が欠損しているため全長は不明である。片面が峰状に膨らむため断面形は三角形を呈する。

(3) 砥石(図版8-5、表4)

今回の調査では碁石状石製品は10点出土している。ほとんどが6区および7区の旧表土面より検出されている。形状は橢円形のものが多く、碁石ではない可能性も考えられる。庭に敷き詰める玉砂利石と類似した様相を呈するため、生活面に使用していたことも考えられる。詳細は第4表にまとめた。

第3節 まとめ

今回の調査においては、想定されていた侍屋敷は確認されず、小規模な建造物があったことが判明した。これについては時代が不明であるが、狭小な平場の中で最も地盤の安定した地区を選んで営まれていることから、この平場の中心的な建物とみられる。したがって当平場は大規模な建造物は存在しなかったことが明らかとなった。

また、SK03が宗教関連施設である可能性が高いことが明らかとなった。このことは、「会津郡二本松城之図」(国立国会図書館蔵)に基づいて、中世の状況を示した「二本松城縄張図」(『二本松城址Ⅱ』別冊編2頁)に描かれた、“権現丸”との関連が想定される。“権現丸”とは畠山高国が当初“乙森”に勧請した熊野権現を、満泰が西の郭に祀ったものであると考えられている。なお、このとき乙森から東の郭に遷宮された八幡宮は寛永4年(1627)には松下重綱が鹿子田館に遷し、寛文元年(1661)には栗ヶ柵(現二本松神社)に遷宮されたとされている。したがって権現丸についても寛永4年頃までは“西の郭”において存続していたものと考えられる。『山口道斎物語』によれば、権現丸には小祠が存在していたとされるため、SK03は“小祠”に相当する可能性が考えられる。したがって、SK03の存在は

第1表 ピット観察表 (1)

ピット番号	区	平面プラン	規格(cm)		備考	検出土層	断面形
			直径	深さ			
1	8	円形	78	10	2と似る。攪乱か?		
2	8	円形	75	17	1と似る。攪乱か?		
3	5	円形	38	23		グライ層下	砲弾状 凹凸激しい
4	7	円形	25.5	25.5			丸底 でこぼこ
5	7	円形	44	70	西へ内弯		でこぼこ 床面は平坦
6	6	不整方形	39	25	西側に攪乱を受けている		壁直 床面平坦
7	6	不整円形	40	38	柱痕有	地山	丸底 でこぼこ
8	6	方形	22×20	10		貼土	壁直 床面平坦
9	6	円形	18	35		地山	壁直 丸底
10	6	円形	32	25		地山	壁直
11	6	不整方形	35	10	12より古い	地山	内面凹凸あり
12	6	不整円形	28	19	11より新しい	地山	壁直 床面平坦
13	6	楕円形	34×27	43		地山	壁直 床面平坦
14	6	長方形	31×28	24		地山	内面凹凸あり
15	6	不整楕円形	44×33	27.5	内弯気味	貼土	床面は丸みがあり凹凸あり
16	6	不整方形	42×38	63	S K 05より新しい	貼土	壁直 床面平坦
17	6	不整楕円形	45×39	51		貼土	内弯ぎみ
18	6	不整円形	36	37	S K 05より新しい 柱痕有	地山	壁直 床面平坦
19	6	隅丸方形	36	57		貼土	やや内弯ぎみ 丸底
20	6	不整長方形	39×35	27	“テラスをもち、柱痕部分が一段下がる”	地山	壁直 床面平坦
21	6	隅丸方形	28	29	南側にテラスをもち柱痕が一段下がる	地山	壁直 床面平坦
22	6	不整円形	30	15		地山と貼土の境	皿状 西側は直に落ち東側は緩やかにおちる。
23	6	円形	35	48.5	上部に石有 内弯ぎみ	貼土	壁凹凸有 丸底
24	6	不整円形?	118	10		地山	皿状
25	6	方形	16	9	S D 02より古い	地山	壁直 丸底 S D 02の底
26	6	円形					皿状
27	7	不整楕円形					皿状 中央に石有
28	7	不整楕円形	41×26	16			内面凹凸あり
29	6	不整方形	22	29.5		貼土	壁直 丸底
30	6	楕円形	33×28	12.5	S K 06より新しい	S K 06	壁直 床面平坦
31	6	楕円形	40×31.5	45		貼土	凹凸あるが壁直 床面やや丸み帯びる
32	6	円形	44	48	テラスをもち柱痕が一段下がる	貼土	北側内弯
33	8	方形?	26	42	33' と 33" と重複。柱痕		
33'	8	方形	46	?			
33"	8	方形	53×58	48	33の掘りかた		
34	8	不整円形	29	34	柱痕有		砲弾状の丸底
35	6	不整形	56×42	48	北側にテラスをもつ	地山	壁直 床面平坦
36	6	楕円形	54×45	32		火碎流	東側に内弯する 床面平坦
37	6	不整円形	30	62	柱痕有		壁直 床面平坦
38	6	楕円形	56×40	12			皿状 内面凹凸あり
39	6	円形	23	12		地山	壁直 床面平坦
40	6	不整長方形	70×66	18	41より古い 西側にテラスあり 上部に石が敷き詰められている	地山	壁直
41	6	不整長方形	63×57	28	40より新しい 南側にテラスあり 最深部の底には石有	地山	壁直

第1表 ピット観察表 (2)

ピット番号	区	平面プラン	規格(cm)		備考	検出土層	断面形
			直径	深さ			
42	6	円形	20	10		地山	壁直 床面平坦
43	8	円形	28	35.5	内面石多い		凹凸あり
44	8	楕円形	33×24	23	柱痕か?		凹凸あり
45	8	不整楕円形	48×41	21	西側にテラスあり 東側に柱痕か		
46	8	不整形	(28)×40	11			内面凹凸あり
47	8	楕円形	(53)×32	4			皿状
48	2	円形	18	9		火碎流	壁直 床面平坦
49	6	円形	48.5	31	底面北側にピット有	貼土	椀状
50	6	円形	25	38	柱痕有 底に石有	地山	壁直 床面平坦
51	6	不整方形	28	35		貼土	床面丸みを帯びる
52	6	方形	25	25	壁面に立てるように礫がある	地山	壁直 丸底 ビン?
53	10	円形	32	10		貼土	壁直 底面凹凸あり
54	6	円形	35	42	底面に石有	貼土	内弯ぎみ 壁直 床面平坦
55	6	円形	34	50	柱痕有	地山	壁直 床面平坦
56	6	円形	17	24		貼土	壁直 丸底
57	6	隅丸方形	28	32		貼土	壁直 床面平坦
58	6	不整楕円形	24×19	53		貼土	壁直 床面平坦
59	8	不整方形	23×(29)	51.5		貼土	壁直だが凹凸有 底面は丸みを帯びる
60	8	不整形	43	55	東側にテラスあり	貼土	壁直
61	8	不整方形	19×14	51.5		貼土	壁直 床不明
62	6	楕円形	27×21	20		地山	壁直 丸底
63	8	円形	25	20		貼土	壁直 丸底 西側に石有
64	8	不整方形	30×30	80	小礫で落ち際を囲む	貼土	壁直 床面平坦
65	6	円形	36	31	66より古い 柱痕有	地山	壁直 床面平坦
66	6	不整円形	40×32	12	65より新しい	地山	壁直 平坦 北側にテラスを持つ
67	10	円形	56	57			壁直 床面平坦
68	8	隅丸方形	31.5×36	43	一段テラスを持ち丸底の底面に達する 上部に小礫多い		
69	8	隅丸方形	19	6		グライ層下	壁直 床面平坦
70	8	長方形	38×29	26.5	内部に石がたくさんある	貼土	壁直 床面平坦
71	8	楕円形	32×26	25.5	底部に石あり	貼土	
72	8	方形?	(29)×27	5			皿状
73	8	不整楕円形	58×38	43	南にピットあり ピット内部に石有		皿状
74		円形	16	27	全体が北へ傾いた断面	貼土	壁直 丸底
75	8	隅丸方形	22	51			壁直 床面平坦
76	10	長方形	32×29	38			壁直 床面平坦
77	10	不整円形	24	12			壁直 床面平坦
78	3	円形?	47	32		グライ層下	壁直 床面は凹凸有

第2表 出土遺物観察表[鉄製品]

図版番号	挿入番号	遺物名	出土地点:層位	規格(mm/g)			関連遺構	備考
				長さ	太さ	重さ		
第20図-1	図版8-4 e	釘	10区 S D04	59.5	7.5×7.0	7		下端欠損
第20図-11	図版8-4 k	不明鉄製品	10区 S D04 上層	310	9.0~7.0	84.7		下端欠損
第20図-5	図版8-4 a	釘	6区 6層上	41	6	7.8		下端欠損
第20図-2	図版8-4 f	釘	7区 1層	87	5	15		
第20図-3	図版8-4 g	釘	7区 1層	118	6	12.4		上端欠損
第20図-10	図版8-4 j	カスガイ	7区 1層	242	11	181.2		
第20図-8	図版8-4 h	クサビ	7区 3-1層	71	29×9	51		下端欠損
第20図-4	図版8-4 d	釘	7区 3-3層	65	8.0×7.0	17.7		下端欠損
第20図-7	図版8-4 c	釘	7区 3層カクラン	56	10.5×7	10.7		上下端とも欠損
第20図-6	図版8-4 b	釘	7区 3層カクラン	45.2	8.0×7.0	6.8		
第20図-9	図版8-4 i	不明鉄製品	8区 1層	52	28×12	43.5		上下端とも欠損
		鉛弾	4区 2層	直徑12		5.7		三枚筒火縄銃

第3表 出土遺物観察表[銅製品]

挿入番号	図版番号	遺物名	出土地点:層位	規格(mm/g)			備考
				長さ×幅	直 径	重 さ	
第15図	原色図版2	銅 碗	2区 S K03 下層	器高30	61	13.7	外面に線刻有り 1/2欠損
第20図-14	図版8-1 a	雁 首	3区 3層下	54	10	7.3	
第20図-12	図版8-1 b	不明銅製品	6区 傾斜部下層 石列1付近	31×14		2.8	
第20図-13	図版8-2	不明銅製品	10区 4層	高さ10	16	1.5	半球状 直徑2mmの穴3基あり

第4表 出土遺物観察表[碁石]

挿入番号	図版番号	遺物名	出土地点:層位	形状	規格(mm/g)			備考
					直 径	厚 み	重 さ	
	図版8-5 a	碁石	2区 1層	楕円	18.5×14	3.2	1.4	
	図版8-5 b	碁石	6区傾斜部下層 石列1付近	楕円	15.5×12.5	5	1.4	
	図版8-5 c	碁石	6区5層	楕円	20.2×14	4.1	1.7	
	図版8-5 d	碁石	6区5層	楕円	15.5×12.8	6	1.6	
	図版8-5 e	碁石	6区崩落土層	不整楕円	17×10.5	4	1	
	図版8-5 f	碁石	7区3-3層 S E01付近	円	22.5	7	2.6	1/2欠損
		碁石	7区3-3層 S E01付近	不整長方形	17.5×13.5	4	1.6	
	図版8-5 g	碁石	7区3-2層	楕円	15.6×10	5	1.2	
		碁石?	4区表土	不整円	27×24.5	5.1	5.1	
		碁石?	4区6層	不整形	24×11.5	2.5	1	
第18図-15	図版8-3	円板状 石製品	10区 S D04	円形	30.5	8	14.1	

『会津郡二本松城之図』を裏付けるものといえ、当平場北側は中世には“西の郭”として捉えられていたと考えられる。

今回の調査では、昭和40年代の地形改変を重視しなかったため、作業の効率が上がらなかったことが大きな反省点であった。とはいえ、本来の地形が急傾斜地であり、これに盛土をして平坦面を確保している様子が明らかとなった。平坦面はかなり狭小で、盛土をした部分も水平にするまでには至らず、傾斜地のまま用いていたようである。そして、このわずかな平坦面は地山が露出していることから、斜面を削りだして確保した可能性も考えられよう。旧盛土(L 4層)により帯郭を成形した時期は出土遺物が希少であるため明確ではないが、石組みの井戸(S D01)が盛土をしながら築かれた状況から判断して、慶長年間と推定される。

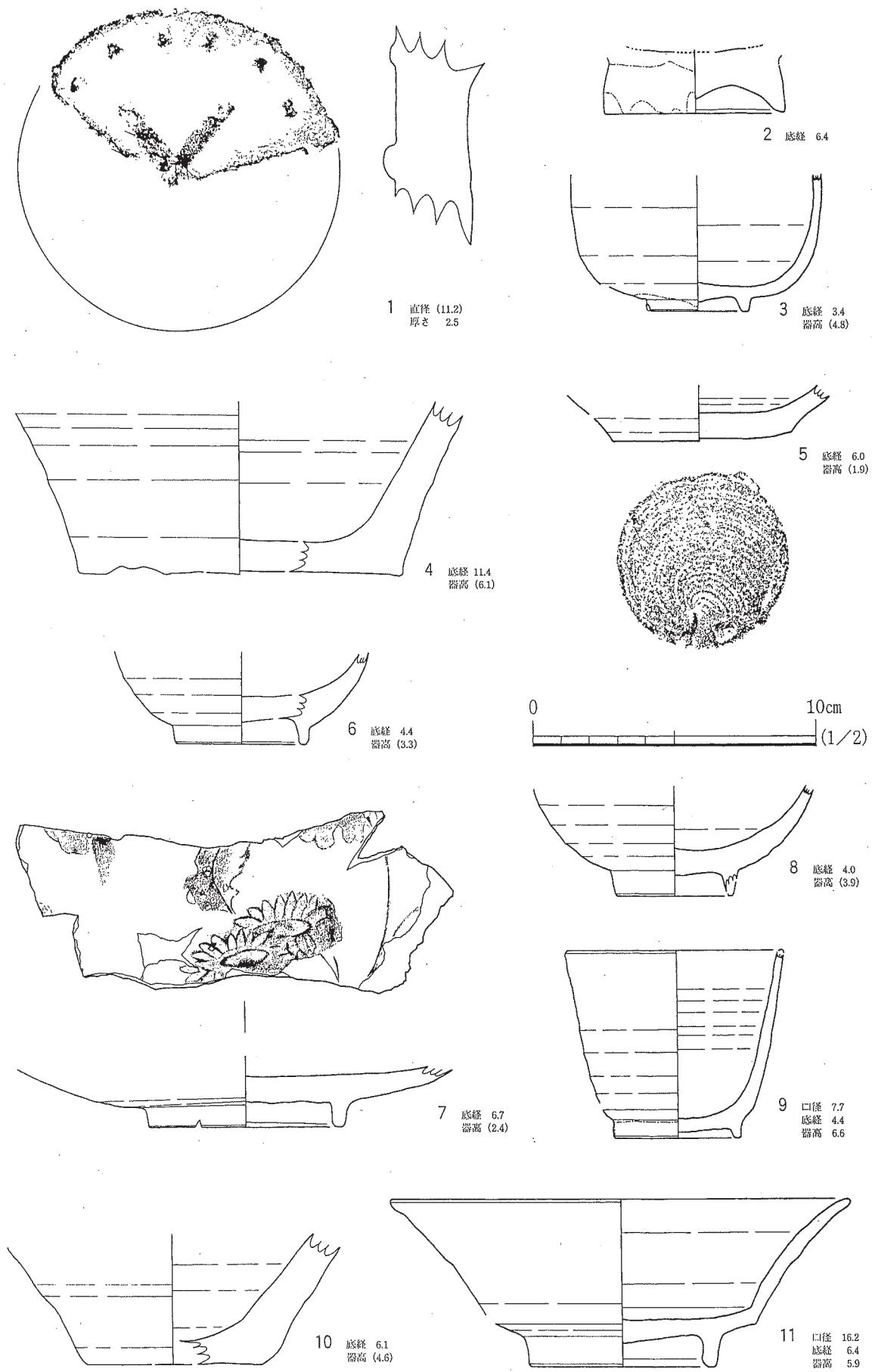
しかし、SK03の存在は、中世まで当平場の利用を遡らせる可能性がある。したがって当平場の変遷は2時期あったと推定される。第1期は切岸により生じた狭小な平場のみで利用していた時期であり、畠山氏による築造当初の様相である。第2期は旧盛土(L 4層)によりやや平坦面を広げた時期であり、石組みの井戸(S E01)を築いた慶長年間の頃である。丹羽氏の家紋の入った軒丸瓦が、旧盛土上面の遺構から検出されていることからその後丹羽氏の時期まで同様の形状の帯郭であったと思われる。さらに昭和30年6月5日の新聞記事(中央新報)によれば下草刈りの際にこの井戸を再発見した様子から、昭和40年代に公園化するために盛土をするまで大きな改変もなく、慶長期の帯郭の形を維持していたものと推察された。

以上のように当平場の改変が2時期にわたって行われ、特に北側の部分については中世の“権現丸”として機能した可能性が指摘できたことは大きな成果といえよう。また、再発見された石組みの井戸は当城址に現存する遺構の中でも最古段階に属するものとみられ、その構造・築造技術が判明したことは石垣あるいは石組井戸の築造技術を考える上で貴重である。さらに今回の調査では、畠山氏築造当初の様相がわざかながら明らかとすることができ、『会津郡二本松城之図』の信憑性を考える上で重要な調査であったといえよう。

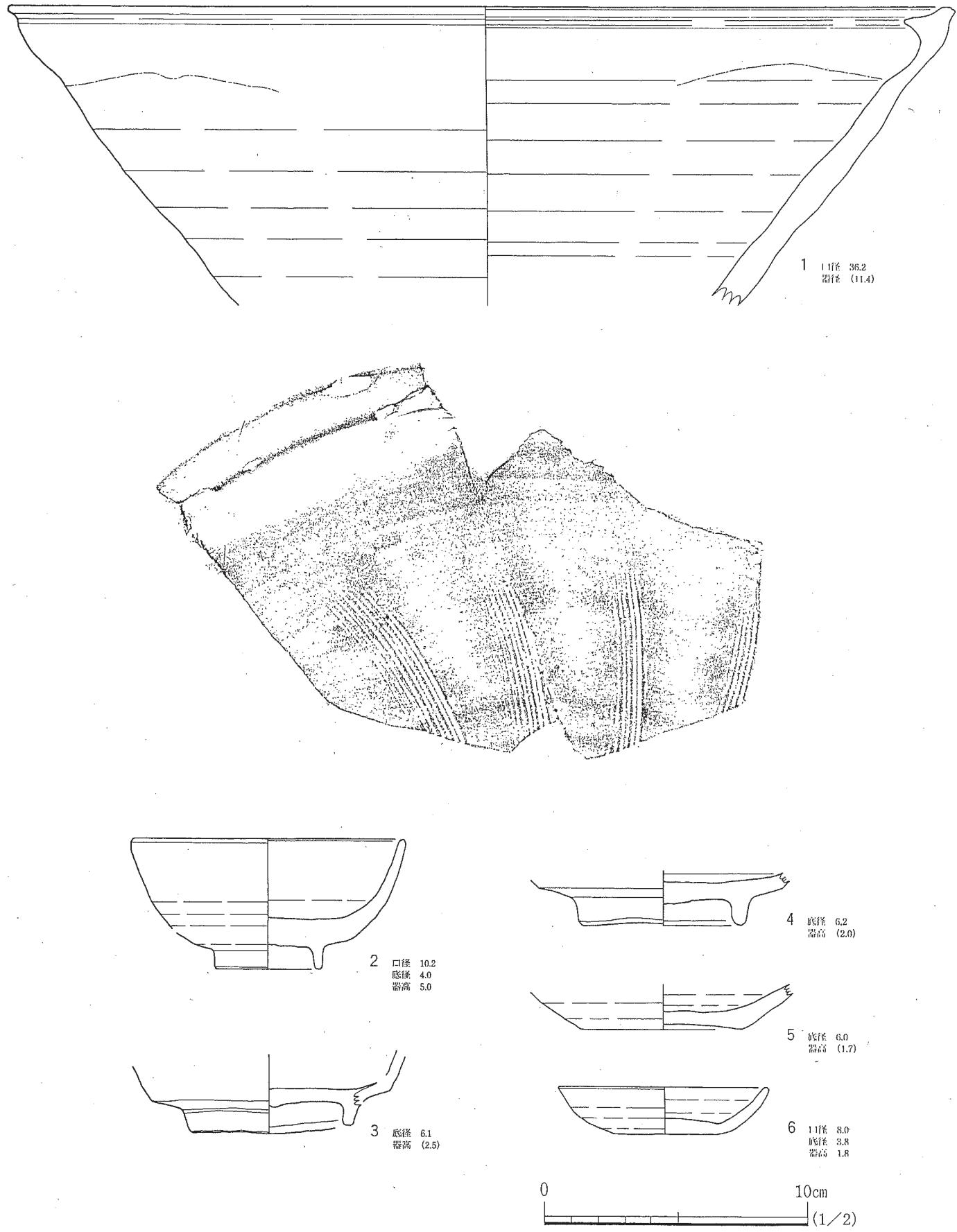
《参考文献》

- 1992 『二本松城址Ⅰ』二本松市教育委員会
- 1997 『二本松城址Ⅱ』二本松市教育委員会
- 2000 『二本松城址Ⅲ』二本松市教育委員会

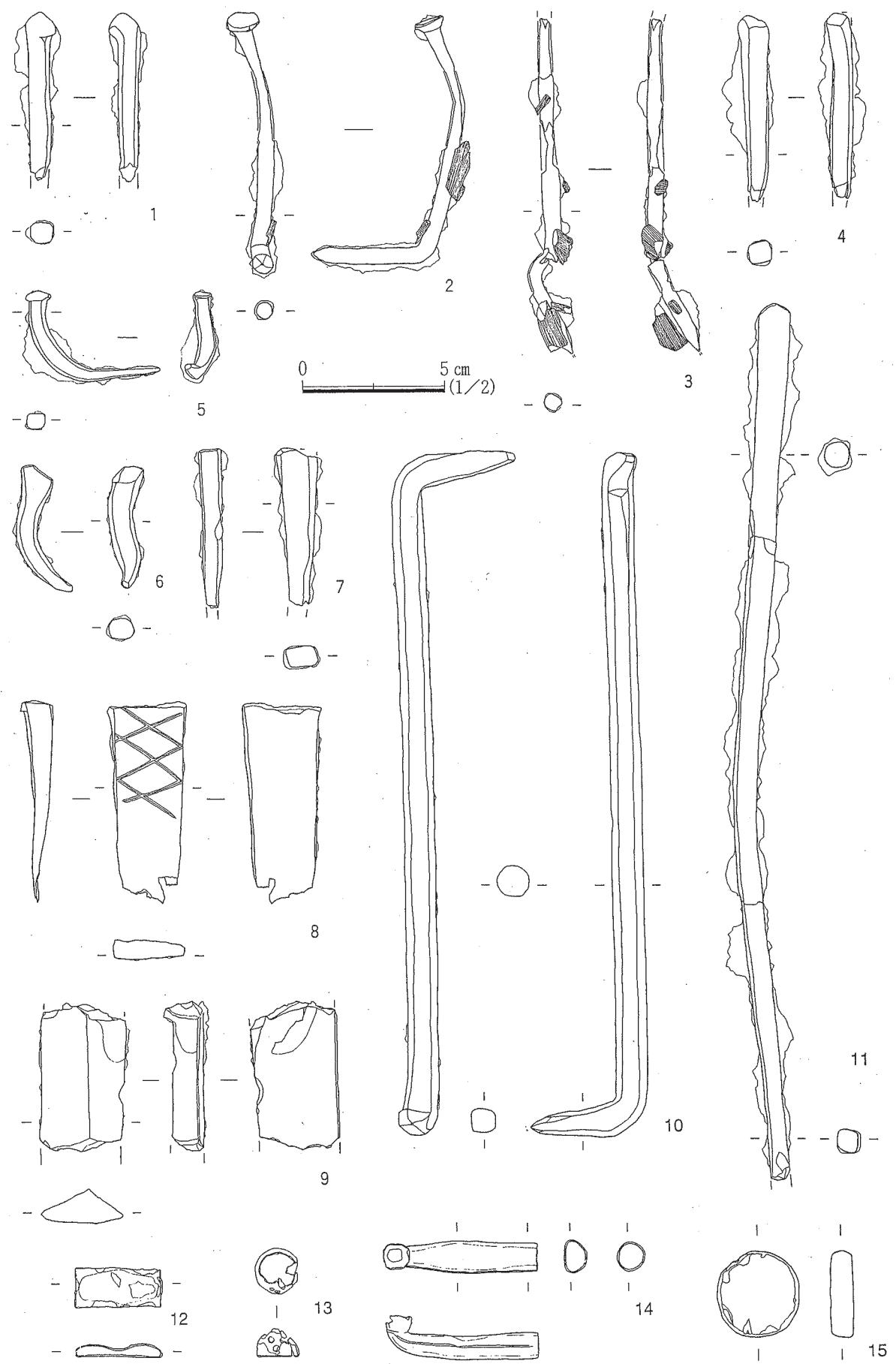
遺物



第18図 出土遺物実測図 陶磁器類(1)



第19図 出土遺物実測図 陶磁器類(2)



第20図 出土遺物実測図 鉄・銅製品、石製品

報告書抄録

ふりがな	にほんまつじょうし4							
書名	二本松城址IV							
副書名	平成12年度発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	二本松市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第17集							
編著者名	中村真由美							
編集機関	福島県二本松市教育委員会							
所在地	〒964-8601 福島県二本松市金色403番地の1							
発行年月日	西暦2001年3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
にほんまつ じょうし 二本松城址	ふくしまけんにほんまつし かくない 福島県二本松市郭内4丁目	07210	00019	37° 35' 50"	140° 25' 51"	第5次 20000914 ~1115	825m ²	保存管理計 画に基づく 資料収集
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
二本松城址	城館	中世～近世	掘立柱建物跡2 井戸跡2 石敷遺構1 石列2	陶磁器(肥前、相馬、岸) 銅碗 釘 クサビ、カスガイ 雁首 磨石				平場利用状況を把握。 慶長期の石積みの井戸を発見。 銅碗の出土により權現丸である可能性を示す。

二本松市文化財調査報告書 第17集

二本松城址IV

平成12年度発掘調査報告書

平成13年3月30日発行

編集・発行 福島県二本松市教育委員会

福島県二本松市金色403番地の1

TEL0243-23-1111

印刷 株式会社 日進堂印刷所

福島県福島市庄野字柿場1番地の1

TEL024-594-2211